
ガイラルの迷宮

光崎 総平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガイラルの迷宮

【Nコード】

N8068X

【作者名】

光崎 総平

【あらすじ】

突如として出現した迷宮。王国が指揮する探索部隊さえも飲み込んだ死の地に、一人の少女——サラが挑戦の足掛かりを作る。彼女がもたらした情報は人を迷宮へと駆り立てるに足るものだった。人々の願いを、祈りを、欲望をも受け入れる迷宮で、サラは一体何を掴むのか。第二章からは毎週土曜の0時更新となります。

プロローグ

空に照る太陽と、青々と茂る緑の木々。

空気はどこまでも清涼で、生きる活力を与えてくれる気がする。

そんな場所が地下であることを誰が信じるだろうか。分厚い岩盤の下に構成された、巨大な迷宮の一部であることを。

益体もないことを考えながらも、サラ・セイファートは周囲への警戒を怠らない。

突如出現した巨大な構造物、これに王宮が付けた名は『ガイラルの迷宮』であつた。かつて、神々が作ったという迷宮にちなんだ名前だ。

送り込まれた数々の調査隊を全て壊滅に追い込んだこの迷宮へ、サラと他数組の命知らずが潜りこんだのだ。

他の者たちはどうか分らないが、サラは一応公的な依頼として送り込まれた最精鋭の一人だ。魔術師協会の長の直接の命令により、内部の調査及び可能であれば有益そうな試料を持ち帰ることを任務としている。

若干十五歳で魔術師協会長の懐刀にまで上り詰めた少女は、今どんな危険があるのかさえ分からない死地で孤軍奮闘していた。

「……周囲に魔物の反応はありませんね。ここで休みましょうか」

ぽつかりと開けた場所に出たため一度立ち止まり、ひとりごちながらサラは自分の周囲十五フィートを覆う結界を構成してその場に座り込んだ。

既に迷宮へと潜って三日が経過している。持ち込んだ食料と水は大半を消費しており、一度外に出て補給を考える必要が出てきた。収集出来た試料も多く、一度協会に戻って成果を報告するべきかもしれない。

だが、今は休憩が必要だ。常に気を張り続けることを必要とされるため、迷宮内では体力の消耗が激しい。また、内部に生息する魔物たちは外に生息するものよりも遥かに強く、緊張を強いられる場面が多かったのも疲労に拍車をかける。

常人に比べて桁外れともいえる魔力を有するサラでさえ、このざまだ。情報なく突入せざるを得なかった調査隊が壊滅的被害を受け続けたのも頷けるというものだろう。

「まだ全てを踏破は出来ていませんが、どうしましょう。協会まで戻るべきか、補給だけしてまた挑むべきか。手持ちのリバース・スペースにはまだ試料を入れる余裕がありますが、十分な数は揃っていますし……」

悩む。

サラは自慢の長いブロンドの髪を手で梳き、べとつく感覚に眉をひそめた。そろそろ女としてまずいぐらいに汚れてきている気がする。汗とかそういうのはまだしも、魔物の血の臭いがこびりついているのは、女としてというより人としてまずくはないだろうか。

と、結界内のため、そんな風に気を抜いていた時だった。

そう離れていない場所から悲鳴が響き渡る。声の高さからして、女性だろうか。それもだいたい若い女性……下手をすれば幼い子供の可能性もある。僅かに索敵魔術を破棄した隙のことだ。己の愚にサラは歯噛みした。

意識を一瞬で戦闘用に切り替えたサラは、結界を破棄してそちらへと急行する。

膨大な魔力を背景に強化された肉体は容易く人の限界を超える。また、範囲と精密さに優れる戦闘用索敵術式は発動と同時に悲鳴の元とそれを襲おうとしている魔物を感知していた。

術式構成に時間のかかる攻撃術を用意する時間はない。サラは肉体強化の度合いを上げ、目視と同時に魔物にドロップキックをかま

していた。

高速かつ高威力の一撃は、魔物を数十ヤードも吹き飛ばして太い木に叩きつける。人間なら木端微塵になっている威力だったのだが、流石に迷宮の魔物の体は頑強だ。

とりあえず攻撃術と防御障壁を準備しつつ、サラは自分が吹き飛ばした魔物を観察する。

巨大なイノシシがところどころに鉋物による外殻を纏ったような姿の魔物。当然ながら耐久力を見た目相応だろう。下手な攻撃では動きを止められまい。

ならば。

「水よ、全てを切り裂きなさい」

ぽつりと眩き、サラは今にも突進してきそうな魔物の方に手を振り下ろす。

「圧水刃」

超高压、超高速で発射された水が魔物の体を両断する。頭からしっぽまで縦に真っ二つになれば、流石にどんな生物でも生存は不可能だろう。

痙攣すらせず崩れ落ちた魔物を見送り、サラは肩を撫で下ろして襲われていたと思われる人物の方を向いた。

「……………え？」

そこにいたのは、少なくとも人間ではなかった。亜人や魔族、神族、精霊などを含めた、広い意味での人間でさえない。だが、数多の魔物との交戦経験を持つサラでさえ魔物とは断言できない存在だ。ボール状の幅広の葉を頭に生やし、天辺にまだ開いていない花の

蕾を乗せた幼い少女……大体十歳ぐらいだろうか。髪も植物の葉を思わせる緑色だ。

着ているものも長袖のロングワンピースで、草葉を意匠とした飾りがいくつかついている。

この少女は、なんだ？

魔力の流れが異質で、しかし調和がとれている。どちらかという
と魔物に近い性質を持っているようだが、しかし人の形をとっているし、判断が付かない。しかも気絶しているせいで話をする
ことさえもできない。

「この子を連れて、帰還すべきですね。なら、長居は無用でしょう」

判断を下すと同時、サラは指を鳴らして少女の真下にリバー・
スペースの入り口を展開する。

虚数空間であり、時の流れを否定するリバー・スペースはサラ
の魔力によって形成される亜空間だ。この中に入れておけば安全に
協会まで運ぶことが出来る。

黒い影のような入り口に少女が飲み込まれるのを見届けたサラは、
再び全身の強化を発動させて入口の方へと足を向け、高速で迷宮を
走り抜けていった。

第一話

「分かったわ。持ち帰ってくれた試料は今すぐに解析に回します。では最後に。サラ、あなたからの個人的な感想を聞きたいわね。あの迷宮、攻略は可能？ 可能なら、たとえばあなたみたいな強い力を持たなくても攻略する方法は考えられる？」

魔術師協会の本部、白妙の塔の最上階でサラは一人の女性と向かい合っていた。

若々しく見える年齢不詳の女性は大きな机に着いてサラの話を聞き、幾つかの点を手元の紙に書き記していく。

魔術師協会協会長、ブリジット・フォンテーヌ。強力な魔力と全ての属性魔法を使いこなす技量を持つ、最上位の魔術師だ。

サラも特に隠すべきことは何もないので、自分の意見を言うだけだ。

「攻略は不可能ではありません。十分な物資を持っていけば、わたくしなら一か月以上留まることも可能だと思います。あとは迷宮内部の魔物や植物を食べられるか食べられないかが分かれば、持ち込むものも少量で済むようになるでしょう。」

個人として強力な力を持つていなくても、組織立って行動できるなら攻略は可能だと思います。その場合、役割を分担し、個々が自分の仕事に特化していることが重要でしょう。前衛後衛が二人ずつ、索敵や警戒に優れる者が一人の計五人ぐらいだと小回りが利いていると思います」

「なるほど、では大部隊で行くのはどう？ 千人ぐらいでござーっ」と行くのは」

「逆に不便でしょう。地中から出てくる魔物もいましたし、弓で止められるとは到底思えない装甲を纏った魔物もいました。下手に人

数が多いと、懷に潜りこまれてあっさりと壊滅させられることも考えられます。調査隊が甚大な被害を受けたのもそれが理由ではないでしょうか」

「ふむふむ。とりあえず了解したわ。あなたも消費した魔力が多そうだし、一週間ほど休養を命じます。その間、仕事は一切忘れて思いつきり羽を伸ばしなさい」

「はい、分かりました。では、失礼します」

一礼し、サラは踵を返して部屋から出て行くとする。
その背中に、ブリジットが声を掛けた。

「ああ、それと、あなたが連れ帰ってきた子は、あなたの管理下に置くわ。うちの研究職はちよつと——いえ、とんでもない勢いでカツ飛んだ馬鹿どもが多いから、変なことになっちゃいそうだし。第七研究室にいるから、連れて行きなさい」

「はあ。では、あの子をわたくしの家で育てるというか、管理させていただきます」

「お願いね。暴走してる可能性もあるから、武力の行使も許可するわ。奴らが抵抗するようなら、殺さない程度に叩きのめしてあげなさい」

「……はあ、失礼いたします」

やたらと念を押すブリジットに不安を覚えつつも、サラは部屋を辞して目的の場所へと向かう。

この白妙の塔は実に地上三十階建て、地下十階建ての高層建築物だ。誰がどう作ったのかは記録に残っていない。が、一つ分かっているのは、どうもこの塔はたった一つの石からできているらしいということだ。それもむやみに頑丈で、生半可な力では一切傷がつかない。

そんな不思議な塔のため、建て増しが出来ず不便なことは不便だ

が、そもそも巨大なので部屋などは余っているのが現状だ。

また、作った誰かも計四十階を階段で上り下りするのは不便だと考えたらしく、各階を結ぶ転移装置があり、塔で働く職員は階段を利用することは少ない。

サラも疲れているときにわざわざ階段を使ったりはしない。さつさと目的の研究室のある階へ行つて、少女を回収して家で寝るだけだ。

そんな淡い未来予想図を描いていたサラは、目的の場所に着いた瞬間にがつくりと膝を落としてしまった。

「あつはつは、これで我らはあと百年は戦える！」

「キヤー、こつち向いてー！」

「君のためなら死ねる！ さあ、俺に命令を！」

よく分からない熱狂に包まれた第七研究室。白衣を着た男女に紛れて、全身に何やら絵具で妙な模様を描いている半裸の男が混じっている。というか、動物の大腿骨らしきものを持って踊り狂っているのは何故だ。その反対側でトマトを投げ合っている男女は一体何者だ。他にも異常な光景は多いが、挙げきれない。

そんな混沌とした空間のと真ん中で怯えているのが、サラの目的の少女だ。机にクロスを引いた即席の舞台の上に座らされている。なんというか、未知の魔物の巢から生贄を助け出すような様相を呈しているのはどうしてだろうか。

深く嘆息し、サラは迷宮内では目立つために使わなかった自己魔力の活性化を行う。

自分の周囲を取り巻く魔力を活性化させ、自分の縄張りにする技術。個人の技術に依じてその支配力は強くなり、魔力量に比例して支配領域が広がる。そして、サラはこの塔でも上位の使い手だ。いきなり強力な魔力の放射を浴び、部屋の中の空気が凍る。

活性化された魔力は空気を発光させ、一種のオーラとして術者を

彩る。それは術者の実力を端的に表すものであり、魔術師ならば見るだけでその能力の高低を理解できてしまう。

圧倒的な実力を背景に、サラはこの研究室の長を目指して歩いていく。

サラは笑みを浮かべているのだが、どうしてかこの研究室を任されている初老の男性は顔を引き攣らせて後ずさりしている。

無駄な努力を。どうせ逃げ場などないのに。

「あの子を受け取りに来ました。これは協会長からの直接の命令です。また、わたくしにはこの命令に従わなかった者に対する實力の行使を許可されています。

大人しく彼女を渡していただければ、双方にとって最良の結果を迎えることが出来ると思います。ですが、もし抵抗されるのでしたら、全力でどうぞ。安心してください。殺しはしません」

にっこりと、サラは笑う。

最年少で協会最強の戦闘魔術師の一人に数えられるサラの話は、協会内のある程度の地位にあれば聞いたことのないものなどいない。それだけでなくとも戦闘に長けた魔術師と研究特化の魔術師とで矛を交えれば、どうなるかは明白だ。

カクカクと頷くことしかできない研究室の面々にため息をつき、サラは活性化した魔力を収めた後、まだ震えている少女の元へ行つて手を差し伸べた。

「大丈夫でしたか？」

おずおずとサラの手を取り、その胸に飛び込む少女。よほど怖かったのか、涙までにじんでいる。

それを見たサラがギロツと周囲を睨みつけると、流石に調子に乗り過ぎていたのを自覚したらしくみんなバツが悪そうに目を逸らし

た。

「……まあ、一応何事もなかったのでこの件は誰にも報告しませんが、今度こういうことがあったら問答無用で吹き飛ばしますからね？」

眉根を寄せて言うサラに、誰もが顔を引き攣らせて後ずさった。強められた語気に本気を感じ取ったのだろう。

反省しているようなのでそれ以上は追求せず、サラは少女の手を引いて部屋を出ていく。そのとき、挨拶代わりに手近にあった鉄製の柵をちよんとつついた。

「では、皆様。試料の研究、お願いしますね」

最後に優雅な一礼をし、去っていくサラ。

あとに残されたのは立ち尽くす研究員たちと、指ぐらいの大きさの穴が開いた柵だけだった。

能力的には高くとも、あまりにも若い……というか幼いサラの協会内での地位は低い。協会長の近衛として、また色々な荒事の対処係として数々の優先権などを与えられてはいるものの、給料は少なく、高い地位を持つ者に与えられる馬車などの交通手段は与えられていない。同年代では出世頭でも、全体から見ればまだまだ低位なのだ。

とはいえ、そのことにサラは不満を持っていない。能力が高いといっても、それは魔法を使う能力が高いだけであり、人を教える力

や事業を成功させる力、研究する力が高いわけではない。幾ら魔法が上手くても、それを後進に指導できなければいつまでもただの兵卒だ。サラはそれを自覚している。

それに、サラは一応だが一戸建ての家に住むことが出来ている。協会に与えられたものではなく彼女の師が死んだときに、サラに受け継がれたものだ。郊外にあるため、やや不便だが静かで土地自体も広いのでサラは気に入っている。

協会本部からは結構距離があるので、短くない時間歩かなければならない。その間、この植物っぽい少女を連れて街中を歩かなければならないので、ちよつとサラは心配していたのだが、それは杞憂に終わった。

このトゥローサの街には魔術師協会の本部があるため、他の街よりも魔術師に対する他の市民の理解はある。だが、それでも一般人にとつては魔術師とはお化けのようなものだ。そのため、騒がれることもなく、『あ、また魔法使いが変な格好してる』というような感じで誰にも気にされなかったのである。

なんというか、サラにとつてはもう少し実態の周知を頑張るべきだと思わされる出来事だった。

まあ、そんな問題も浮かび上がったが一応何事もなく家に着くことが出来、サラは安堵の息を漏らす。

「はい、到着です。今日から、ここがあなたの家ですよ」

そう言つて、サラは少女に自分の家を示す。

室内でも魔法を使うため、暴発の危険性を考えて強固なレンガ造りで、更に地形を利用した永続魔法でその強度を上げている。ガラスは高価で脆いために一切使われていないが、窓と家全体に強力な虫除けの魔法を付与されているので虫が入ってくることはない。また、窓は鎧戸を備えていて、雨や風の強い日はこれを閉めることで風雨をしのぐようになっている。

個人の家としては広いが、それは弟子を取って育成することを前提としているからだ。まだ若すぎるサラに弟子はいないが、あと十年もすれば弟子の育成が仕事の一環になるだろう。

先の話だが、いわゆる天才型のサラにとっては気の重い話である。教えるのは苦手なので、そのころまでには克服しなければならぬ。そんなことがふと頭をよぎったが、サラは軽く吐息して吹き飛ばす。今考えることではない。育成のやり方など、まず自分が教えるに足る実力と知識と経験を手にしてからだ。そんなことよりも、まずは目の前の問題から解決しなければ。

問題。言ってしまったえば、連れてきた少女の扱いだ。

サラに懐いているらしく、手を引いて歩いているときも特にぐずったりすることもなかった。ただ、言葉が分からないのか、それとも喋れないのか一言も口を開いていない。ただ、サラが話しかけると笑みを返してくれるぐらいだ。

そのため、幾つか質問すべきことがあるのに質問できない状況にある。というか、名前も分からないのではどうしようもない。

「……えーっと、あなたのお名前はなんですか？」

家に入る前に、サラは道中何度もしてきた質問をする。

これはこの家に防犯用の魔法が掛かっており、家の主が名前を知らない人物は家に入れないようになっていいるからだ。

もうどうしようもないので、これが最後の問いかけのつもりだ。答えが返ってこないなら、仕方ないのでサラ自ら名前を付けるつもりだった。

そして、案の定何も答えは帰ってこない。少女はただニコニコと笑っただけだ。

「では、あなたの名前はイーリスです。分かりますか？」

『名付け』の意味を知らないわけではないサラは、道中必死で考えてきた名前である。

名は体を表すといわれるように、名前はその存在を縛る。名前とは力であり、かたちだ。ゆえに、名無しに名前を付けるときは最大限注意を払う必要がある。

イリスとは花の名前だ。この辺りでは愛されている花で、いくつか種類があるが基本的にはまとめてイリスと呼ばれている。青、白、黄色がこの辺りだと代表的だが、紫や薄い赤色のものもまれにあり、結構色とりどりだ。

イリスの花に込められる思いや言葉も良い意味のものが多く、花と同じくみんなに愛されるようになってほしいという願いを込めている。

分かっているのかいないのか、少女——イリスはじつとサラの顔を見上げるだけだ。

しばらく目を合わせていると、不意にイリスの目の色が変わった。比喻ではない。それまで血のように赤かった目が、スツと薄い青色へと変わったのだ。それは、この周辺に自生するイリスの花で、最も多い色である。

「イリス、ちゃん？」

なんとなく不安になり、サラが話しかける。

と、それまでは何を話しかけても笑顔を見せるだけだったイリスが、首を傾げながら口を開いた。

「わたし、いーりす？」

「……ええ、そうですよ。あなたの名前はイリスです」

「なまえ。わたしは、イリス。おねーちゃんは？」

「わたくしはサラです。サラ・セイファート。サラ、と呼んでくださいね」

正直なところ、名前を付けただけで急に話せるようになったことには驚いたが、しかしサラは即座に平静を取り戻して安堵の息を漏らす。

こういう、『名付け』によって知性を得る例は幾つか知られている。それは主に精霊やそれに近い存在が初めてヒトに接したときのことが多い。自然そのものに近い名無しの状態から、確固たる自我を確立し得る名有りへの変異、そのときの状況に非常によく似ているのだ。

ただ、このイーリスは精霊ではないだろう。精霊特有の清浄過ぎる魔力や存在の希薄さが無い。精霊寄りの魔物、または未発見の精霊に近い亜人かなにかだと思われる。

何にせよ、意思疎通ができることは良いことだ。これからの生活について深刻に悩んでいたサラとしては、話が出来るというだけで救われた気分だった。

「では、中に入りましょうか。長く歩いて疲れたでしょう」

サラはそう言ってイーリスの手を取り、そつと引いて家の中へと入っていく。

師の死後、たった一人で暮らしてきたサラにとって、二年ぶりの同居人。それは不安もあるが嬉しい出来事でもある。

出来ることなら、平穏な日々が続くように、とサラは祈るのであった。

第二話

サラがイーリスと暮らし始め、三日が経った。

命令通り、サラはその間一度として白妙の塔には近付かず、のんびりとした日々を過ごしていた。とはいえ、勘を鈍らせないために簡単な訓練は行っていたが。

イーリスと暮らすうちに、彼女について分かったことがいくつある。まず第一に、イーリスはどちらかというと植物に近い性質を持っているということだ。

日向を好み、朝によく水を飲み、夜に水を飲みすぎると萎れる。人間と同じものを食べることは出来るが、基本的には小食。また光合成でもしているのか、日向にいるイーリスの近くにいると空気が美味しい。

次に、知能は決して低くはない、むしろかなり高いと思われること。まだ話せるようになって三日しか経っていないのに、見た目相応の受け答えが出来るようになっていく。今ではサラが昔集めていた物語や詩篇などをすらすと覚えていく。今ではサラが昔集めていた物語や詩篇などを自分で読んだり、読めないものはサラに読んでくれとねだるところとさえある。いい傾向だ、とサラは思う。

最後にどうやら植物と会話が出来るとも分かった。イーリス自身もこれらの草木を踏んだり木の枝を折ったりしているので別に話せるからどうだということはないようだ、結構便利ではある。なにせ、サラだと見分けられない薬草の類でもイーリスは決して間違えることなく採取できるし、裏庭の家庭菜園の野菜もどれか食べごろかすぐに判別してくれるのだ。見て分かるのではなく、植物の声を聞いているのだとイーリスが言っていたので判明した事実だ。

少々変わったところはあるが基本的に素直で妙なこともしないため、サラも安心して羽を伸ばすことが出来るのだ。

そんな平和な日の夕方、サラが毎日行っている魔術の訓練を始めた時のこと。

サラが普段行っている訓練は基礎の基礎が主だ。全ては基本から成るといのが彼女の師の口癖であり、サラはその教えを徹底的に叩き込まれているため何をおいても基礎基本は欠かさない。

この三日間毎日やっているためか、イーリスも興味を覚えたらしくサラの訓練風景をじーっと見ていた。

家の外、広くて何もない庭で訓練を行っているため、その様子は他の人からもよく見える。特に塀や垣などを作っていないため、素通し状態だ。

だからだろう。サラの訓練しているところから三十ヤードほど離れたところから驚いたような声が聞こえてきた。

「うわっ、すっ……」

サラは今行っている訓練を続けつつ、そちらに目をやる。

と、そちらから軽鎧を来た少女が歩いてきているのが見えた。年の頃はサラより少し年上くらいだろうか。距離があるので顔などは分らないが、サラの知り合いではない。この距離で他に分かることは、彼女がブラウンの髪を肩口で揃えていることくらいだろうか。

何の用事かは知らないが、サラはまだ訓練の途中だ。訓練の内容は魔力で球を作り、それを出来る限り維持すること。魔力は器に入っていない限り拡散しようとする性質を持つため、よほど強固な支配力を持っていないと長時間維持することは難しい。ただ熟練すれば数分維持することは容易いため、慣れてきたら数を増やすのが普通だ。ちなみにサラの周囲に浮かぶ魔力の球の数は二十を超える。普通は五個の魔力球を十分間維持できれば一人前とされるため、これはかなり凄い。

鎧を着た少女が近くまで来たとき、限界を迎えたらしい幾つかの球が形を崩して大気中へと拡散していく。サラはそれを苦々しげに

見て、残る全ての球を消した。

「で、何の用ですか？ わたくし、休暇を頂いている身なのですけれど」

「あ、お休み中でしたか。失礼しました。私は協会所属の魔剣士で、クレールといえます。こちらにかの迷宮に単身で挑み、多くのものを持ち帰った人物がいると聞いてきたのですが……今、いらっしやいますか？」

「それはわたくしのことですからけれど、何か御用でしたか？」

近付いてきた少女——クレールにそう言っ、サラはにこりと笑いかける。

それに対し、クレールは不思議そうな顔をして首を傾げた。

「え、あのー、サラ・セイファートさん？ 物凄く強い方だと聞いてきたんですが……」

「わたくし、強いですよ。なんなら試してみますか？」

笑みを崩さず、サラは言う。

いつものことだ。評判に対して若すぎるサラは、普段の状態だとなめられる傾向が強い。戦闘用の服装をしていたり、戦闘態勢を取っていない限り、実力者とは見られないのだ。

そもそも、サラの見た目は深窓の令嬢という言葉が似合うような清楚な美少女だ。外見にはサラが強いと判断できるような要素はない。服装も簡素なワンピースなどを好むため、より華奢に見えてしまう。

クレールもやはり外見から判断したようで、サラの言葉を戯言と取ったらしい。

「では、お願いします」

クレールが軽く苦笑しながらそう言った瞬間にサラは動く。

自然体の状態から力まず沈み込むような動きで距離を詰め、三ヤードの距離を潰す。クレールが反応する前に肩を彼女の鳩尾に密着させ、強烈な踏込の力を借りた体当たりをぶちかました。

芯に響く重い打撃を喰らい、クレールは前のめりに倒れ込む。それに巻き込まれる前にサラは後ろに飛びのいて、距離を取り直していた。

咳き込み、激痛をこらえているクレールを見下ろしながら、サラは驚いたように目を丸くする。

今の一撃は意識を刈り取るぐらいのつもりで放ったものだ。そのはずだったのだが、クレールの身に着けている防具にその衝撃はかなり吸収されてしまった。巧妙に偽装されていたので分からなかったが、間違いなく強力な付与魔術が掛けられている。

ふうん、と感心したように吐息し、サラは戦闘用魔術を起動した。圧水刃のような即死級魔術ではなく、衝撃だけの非致死性攻撃だ。それを起動待機状態の魔力球として周囲に展開する。十を超える数の魔力球はそれだけでも相手を威圧するだろう。

いつでも追撃できるだけの用意を整えつつ、サラはクレールが立ちあがってくるのを待つ。サラの経験上、今の一撃からサラの実力を測れるような者ならば彼女を侮ったりはしない。むしろ、不意打ちをしないとダメなやつ、と判断して襲い掛かってくるのが大半だった。

サラが相手の出方を待っていると、クレールは信じられないものでも見たような表情でサラを見てきた。本気で打ったわけでもないし、展開している魔術もそう大したものではないので、サラはちょっとヘコむ。

「えーっと、あの、すみませんでした。自力で立てそうもないので、起こしてもらってもいいですか？」

「はい、いいですよ」

魔力球を消し、サラは手を差し伸べる。クレールがその手を掴むと、サラはゆっくりと引き起こした。

何とか起き上がったクレールはケホケホと何回か咳き込んだあと、大きく深呼吸してサラに向き直る。

クレールが何かを言う前に、サラは笑みのまま口を開いた。

「それで、何の御用でしたか？ わざわざこんなところまで」

「私も迷宮に挑戦したいと思ひまして、色々と教授願おうかと」

「そうですね。まあ、立ち話もなんですし、中でお話ししましょうか。お茶でも淹れますよ」

クレールの前に自分の入れたお茶を置き、サラはゆっくりとクレールの向かいに座る。

無駄な家具のほとんどない部屋だ。居間と台所が繋がっていて、それほど広くはないが綺麗に掃除されている。

イーリスを近くで遊ばせつつ、サラはお茶を一口飲んでから口を開いた。

「それで何が聞きたいんです？ あ、お砂糖はそのツボです。いくつでもどうぞ。牛乳はありません」

「砂糖、いただきます。えっと、迷宮に挑戦するにあたって、どういう準備が必要ですか？ あとは心構えとか」

「まず言っておきますが、一人で挑むつもりならやめた方がいいですよ。死に行くようなものです。一緒に挑もうとする人はいますか？」

「はい。いることにはいるんですけど、ちょっとこう、」

「つまりはみんなより一步先んじていたいということですね？ 迷宮は個人の實力より連携の方が生きそうな場所ですし、あまり突出するのは避けた方がいいですよ。そういう甘い考えの通用する場所ではありません。今までに迷宮へ入って無事出てこれたのは、わたくしを除けばわたくしと同時期に入った一部隊ぐらいでしたか。過剰なほどの警戒をし、不要とさえ思えるほどの準備を整えていないと生き残ることは難しい、そういう場所です。」

それにわざわざ今死に行く必要はないでしょう。わたくしの休暇が明ける頃には持ち帰った試料の解析が終わるでしょうし、その結果有益だと判断されれば協会を挙げて迷宮攻略に乗り出すと思います。その時に参加するのが一番賢いと思いますよ。被害を最低限にするために色々なものが支給されるでしょうし」

言って、サラは自分の持ち帰った試料を思い返す。ほぼ全てが新発見の植物や鉱物、魔物の死骸だ。いくつかは見ただけで分かるほどの強力な魔力を帯びていたり、鋼鉄製のつるはしを砕くほどの強度を持っていたりした。ほぼ間違いなく大人数での第二陣探索隊が派遣されるだろう。その内のどれだけが生き残れるかは疑問だが。

サラも志願していく予定だが、今度はどういう役回りをさせられるか分からない。一人で進んでいいなら何も気にしなくていいが、誰かと組まされる可能性は否定できないのだ。特にサラは超大量のリバース・スペースを個人で常時展開できるため、倉庫役として連れて行くだけで持ち帰れる物の数が恐ろしく増える。また逆にリバース・スペースを常時展開すると、少ない容量でも魔力を食われるため戦闘能力が落ちてしまう。つまりサラを十全に活用するなら一人で行動させるか、倉庫役として一切戦闘させないか、他の倉庫役の護衛として戦闘しかさせないという三択に限られる。

ただし、次に向かう者の中で実際に迷宮を歩き、その内情を最もよく知るサラを一人で行動させるとするのは考えづらい。

自分の運用法を考え、しかし頭を振ってサラはそれを破棄する。次の探索隊の面子も分らないのに思考を巡らせても解など浮かぶわけがないのだ。

とりあえず、サラは目の前の少女から持ちかけられたことの処理をどうするかに思考を切り替えた。

サラの言葉に不満を露わにした表情をしたクレールを見て、サラは嘆息しながら口を開く。

「不満そうですね」

「当たり前です。これじゃ何のためにここに来たんだか分かりません」

「……では、幾つか迷宮内で便利な魔術でもお教えしましょうか？ わたくしの経験から有用だと判断した魔術を。使えるのと使えないのとは大きな差が出るものですから、迷宮挑戦までに使えるようになっているとお仲間より役に立てますよ」

言って、サラは自分の迷宮内での経験を思い出す。必要な魔術というと思い浮かぶのは攻撃系が主だが、迷宮の魔物に致命打を与えられる魔術というとかかなり上級のものに限られるため教えても意味がない。難度を別としても汎用的に有効な圧水刃は本来大量の水を媒介として使う魔術だし、水を使わないとすると莫大な魔力を必要としてしまう。迷宮内に大量の水を持ち込むのはリバース・スぺースでもない不可能だし、水を媒介にしない方だとクレールの魔力量では一、二発で魔力が切れてしまうだろう。

他にも有効な魔術は多いが、わざわざ魔剣士に長い詠唱を要する魔術を教える必要はないだろう。なら、詠唱を破棄しても十分な効果を発揮する、または戦闘には使えないが便利な魔術を教えたほうがいいだろうか。

ふむ、と一つ頷いたサラはカップのお茶を飲み干し、優雅に立ち上がった。

「では、修練室に行きましようか。条件を整えられる部屋のほうが教えやすいですし」

「修練室って……あのー、えっ？」

「まあ、ついて来てください。面白いですよ」

異論を笑顔で封殺し、サラはさっさと奥へと進んでいく。何故かイーリスもそれに続いた。

ぱくぱくと口を開け閉めした後、クレールも出されたお茶を飲み干して二人に着いていくのだった。

家の地下にある広い頑丈な部屋。地下にあるにもかかわらず何故か天井が高い。レンガではなく自然石を成型したもので作られており、地上部の数倍以上の強度がある。

ここが修練室。サラがきつい訓練をしてきた部屋だ。

「ここです。今、明かりをつけますね」

地下で採光の窓などがないため、夜のように暗かった部屋に明かりが満ちた。サラが展開した光の魔術によるものだ。天井そのものを発光させることで部屋全体に光を行き渡らせる術。サラはあっさり行ったが、実は結構高難度の領域術式である。

面白味のかけらもない無骨な部屋。ところどころにある赤黒い塊は血だろうか。

その真ん中に立ち、サラはクスリと笑う。

この部屋に入るのは、サラも久しぶりだった。師の死後はわざわざ一人で修練室を使うような用事もなかったので、自然と足は遠のいてしまっていたのだ。

「まず、迷宮内部の魔物は基本的にかなり強靱です。わたくしの見た魔物の大半は、地上の魔物よりはるかに大きく強かったですね。ですが、その代わりに魔術に対してはそれほど抵抗力は高くないようでした。肉体が強靱なので並大抵の攻撃魔術では話にもなりませんが、逆に言うなら攻撃術でなければ有効だということです。」

なので、まずお教えするのは爆鳴と烈光の魔術です。この二つは迷宮内のほとんどの魔物に効くでしょう。簡単ですし、詠唱破棄しても効果が高いので、覚えておいて損はないでしょう」

「爆鳴に、烈光？ あんまり聞いたことのない魔術ですね」
「地味ですから。こんな魔術ですし」

詠唱も起動呪もなしにサラが魔術を発動させる。

その瞬間、凄まじい轟音と閃光が修練室を満たした。サラが自分とクレールを覆うように強力な対閃光対音響障壁を張っていなければ、サラはともかくクレールは悶絶して倒れていただろう。

それでもかなり眩しくてうるさかったのかふらふらしているクレールを見ながら、サラは人差し指をピンと立てた。

「このように微少な魔力消費で一定時間確実に相手の動きを止められる魔術です。でも、慣れがあるので同じ個体に二度以上使うのはやめた方がいいでしょうね。ただ、これは誰にも相談なしで使うとお仲間も同じように硬直してしまいますので、ちゃんと連携の訓練をした方がいいでしょう。この魔術について質問はありますか？」

音や閃光による影響など一切ないかのようサラはクレールに尋ねる。いや、実際に影響などまるでないのだろう。常に莫大な魔力をその身に収めるサラの肉体は常人を遥かに上回る強度を持つ。障壁で減衰された光や音程度では一切の痛痒を感じない。

だが、クレールはそうはいかない。魔剣士と名乗れるだけの魔力と鍛えられた肉体をしても、急激な音と光は苦痛をもたらすものだ。

サラの言葉を理解し、幾つか質問があるもののしばらくクレールは頭を抱えてうずくまることしかできなかった。

一分ほどもそうしていただろうか。ようやくクレールは起き上がってサラと向き合った。

「……いきなりはやめてください」

「すみません、つい制圧する威力で放ってしまいました。まあ、あれほどの威力はいりません。耳元で爆竹ぐらいの音を鳴らしてあげるだけでも、魔物の大半は悶絶するでしょうし」

「……………えーと、簡単って言ってましたけど、そんなに簡単ですか？」

「音を鳴らすだけですからね。術式も簡潔ですし、狙った場所で音や光を出せるよう数日も訓練すれば充分なぐらいですよ」

「そうですか、他にはありますか？」

一応、実用的な術を教えてもらって機嫌がよくなってきたのか、クレールが少しやる気になっている。

いい傾向だと判断し、サラは次の魔術を教えることにした。

「他には動きを直接止める魔術も結構使えました。大地を媒介にする地縛などが有効で、使いやすいでしょう。迷宮内に土は豊富にありますし、下からの縛鎖に対応できる魔物もそうはいなさそうでした」

「爆鳴に烈光、地縛……つと。他には？」

どこから取り出した紙片に、これまたどこから取り出した羽ペンで教わった内容を書くクレール。

それを見て、サラは割と深く嘆息した。

「遠慮が消えましたね。まあ、一度にたくさんお教えしても覚えき

れないし、ここを迷宮と同じような環境にしますので練習していただく。続きは後日お教えします」

そう言っ、サラはぱちんと手を叩く。

すると、修練室に刻まれた術式が起動し、瞬時に修練室がまるで森のように変化した。

幻術などの類ではない。壁や天井はそのままに床は落ち葉混じりの土となり、よきによきと幾つかの木が生えてきたのだ。

「面白いでしょう？　せつかくのお客様ですし、迷宮挑戦までの間なら、わたくしに断っていただければ自由に使うてくださって結構です。帰るときも声を掛けてくださいね。では、ごゆっくりどうぞ」

啞然としているクレールを尻目に、サラはさっさと部屋を出ていく。イリスも珍しそうにしていたが、サラの後を追って出て行った。

残されたクレールはしばし呆然としていたが、やがて気合を入れた顔つきになり教わった魔術の練習を始めるのだった。

第三話

休暇が明けたサラはイーリスを伴って白妙の塔最上階にいた。

そこにいるのはサラとイーリス、ブリジットだけではない。魔術師協会でも名の通った実力者や研究者が円卓に座っているのだ。この円卓に着けるのは一種の榮譽であるといっても過言ではないだろう。

「まず結論から言わせていただくが、我々研究部は迷宮の持つ資源に大きな可能性を見出した。よって、迷宮への部隊派遣を全面的に肯定する」

最初に発言したのは齢九十を数える立派なひげを生やした老紳士だ。魔術師協会の抱える全研究室を統括する研究部の長。魔術研究に関しては数えきれないほどの功績を残す偉人である。

「解析結果はまだ聞いていない。その資料はあるんだろうな？」

「もちろんだ。リーナ、資料を配ってくれ。並行して説明を行う」

「はい」

老紳士の後ろに控えていた妙齢の女性が指示に従って円卓のみんなに資料を配って回る。

その間に、老紳士は説明するべきことをまとめて口を開いた。

「我々が部隊派遣について肯定的な理由で最も大きい三つをそこにまとめた。細かいことが聞きたければ後で質問をしてもらおう。では一つ目。それはサラの持ち帰った薬草の持つ恐るべき薬効だ。既存の薬ではどんな傷薬でも消毒程度のことしかできなかったが、迷宮内の薬草には傷をたちどころに治す作用があった。この薬草が

ら魔法薬を作れば更なる効果も期待できるだろう。また、他にも万能的に毒への効果を示すものもあった。これだけでも迷宮挑戦の意味は充分だと考える。

第二に、鉱物だ。試料として持ち帰られた量も種類もそう多くはなかったが、どれも地上には存在しないもので特異な性質を備えているものばかりだった。例を挙げればかなり多量の魔力を蓄えることが出来、それを自在とは言わないまでもかなりの自由度で放出出来る石や鋼鉄より強靱な金属などだろうか。これらが豊富にあれば断念していた魔道具がいくつも実現可能になる。

最後に魔物だな。どうも魔術の触媒として極めて優秀なものがあつたり、地上の金属を凌駕する硬度の甲殻を持っていたりするものがあるようだ。多くの試料が必要だが、鉱物以上に武具に向いている可能性もある。

これに関して何か質問はあるかね？」

「薬草の作用に関してだが、高い効果を持つとはいえ魔術でも似たことは出来るだろう。高位術者なら腕の一本ぐらいは生やせる者もいる。必要不可欠とは思えないが」

「逆に訊くが、回復術の使い手など一体どれほどいるというのだね？ 我々魔術師でさえ人口に比しておよそ千人に一人。他者に回復術を掛けられる逸材となれば魔術師の中でも十人から二十人に一人程度。都合、一万から二万人に一人しかない計算になる。だが、薬を大量に生産できれば多くの者が自由に使えるようになるわけだ。この恩恵は極めて大きいと判断するがどうかね？」

「ふむ、一理あるな。では、鉱物の方はどうか？ 断念していた魔道具というかどうかという代物が考えられる？」

「いくつかあるが、最大の利点は定点空間移動装置だ。今までは国を跨ぐような長距離の空間転移には地脈の魔力を利用するほかなかったため大規模な施設が必要だったが、今回発見された石がある程度集まれば魔法陣による相乗効果で部屋一つ分ほどの空間で実現できる。多くの国や貴族ともに恩を売れると思うがどうかね？」

静かに、しかし熱い話し合いが行われる。

この中ではつきりと部隊派遣に賛成を示すのはまだ研究部ぐらいだ。迷宮の危険度は既にサラの報告により周知されているため、部下を失う危険と挑戦によって得られる利益を天秤にかけ、どちらが良いかを悩んでいる者が多い。

中でも戦闘部門の者達は慎重な立場だ。戦闘能力の高い者が多いため、探索部隊の主力は彼らになる。つまり、最も危険な役目を背負わされるのだ。慎重になるのも理解できるだろう。

逆に積極的になってきているのは錬金術部門や薬学部門だ。試料が少なかったため彼らは今回の解析で蚊帳の外に置かれていたが、今までにない素材で色々なものに挑戦できるためやる気になったのだろう。

そんな彼らをイーリスと共にブリジットの後ろで見ていたサラは、何とも言えない思いを抱えながらそれを見ていた。

サラ本人は実際に潜った地点までほぼ安定的に進める实力があるが、それを他者に要求するのは酷というものだ。班を組み、役割を分担し、準備を万端に整えて迷宮に挑戦したとしても生存確率は五割を割るだろう。それほどまでにかの迷宮の攻略難度は高い。

魔物の強さもさることながら、群れで現れる魔物は連携を取ってくるが多く、対処が難しい。またあまり変わり映えがしない風景が続くうえ、植物系の魔物には幻術を用いてくるものがあるため気付かずに食事にされてしまう可能性もある。地中から現れ、あつという間に獲物を引き込んでしまう魔物や、樹上からの奇襲を主とする魔物などの厄介な魔物も数多い。

常に索敵魔術を使い続けるというのも手だが、サラのように規格外の魔力を有していなければそれは難しい。そのため自然と目視に頼ることになり、危険度は上がる。

だがここで成功を収め、名を挙げれば魔術師協会の名を広く広める良い機会であることは間違いない。全員それを理解しているため、

迷宮攻略を否定する者はいない。どれくらいの勝算があるのかを気にしているのだ。

「ふう、考えの固まった我々で話していても埒が明かな。サラ、君の意見を聞きたい。一般の協会員を組織していったとして、どれほどの生存率を見込める？ また、その結果見込める成果は、君に万全の準備をさせ一人で採集を行わせた場合と比べてどちらがより多いと想定できるかね？」

いきなり話を振られ、サラは一瞬だけ驚いたがすぐに考えをまとめて口を開く。

「潜る期間にもよりますが、一般の協会員の実力では恐らく生存率は五割を割るでしょう。迷宮の入り口近くで採集するだけなら生存率は高まりますが、それでは満足できる成果を上げられないでしょうし。」

わたくしが単騎で潜った場合と比較すると、大部隊の方が数は集まると思われます。ただ、魔物も強力ですのでどれぐらいの収穫が見込めるかは運次第かと。その代わり一度潜って生還できれば、生還した方々は迷宮での生の知識や経験を積めますから生存率はグッと上がると思います。二度目以降はかなり効率的に動けるでしょうし、大人数で挑戦するのも悪くはないと思いますが……その分、死者が増えるのはいかんともしがたいですし」

サラの言葉を聞いて、彼女に話を振った壮年の男性が自分の顎を撫でた。

巖のような重厚な存在感を持つ彼は、一度サラの目を見た後、ゆっくりと一つ頷く。

「分かった。協会長、とりあえず、一度この場はお開きにしよう。」

我々が新たに得た情報はかなり多いため、各々の部門に戻って部下と相談する時間が欲しい。

だが、ただお開きにするのではなく、次回の集合までに志願者やそいつらが持つている技能の表を作ってくることを全員にお願いしたい。サラの話聞いて、私は覚悟が決まった」

「異議は……ないみたいね。よろしい。では三日後に再び円卓会議を開催します。その時までによくまとめて来るように。では、解散」

ブリジットが言いながら手を叩くと、ブリジットとサラ、イーリス以外の全員が速やかに円卓から立ち、ぞろぞろと出ていく。数人はサラの方をちらりと見て行ったが、声を掛けられることはなかった。

二分と掛からず、円卓の間に残されたのはサラ達だけとなった。人がいるときは静かだったイーリスだが、人がなくなつて緊張が解けたのかもぞと動き始める。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。……怖い顔、してるよ？ どうしたの？」

サラの顔を覗き込んだイーリスが一瞬硬直する。それほどまでに、サラの表情は強張っていた。

言われ、初めてサラはそれを自覚したのか思わず顔を隠すようにして、手で目を覆う。知らず知らずの内に斬り付けるような目つきになったらしい。

自分の顔を揉み解しつつ、サラはイーリスに微笑みかける。

ようやくいつもの顔になったサラに安心したのか、イーリスも笑顔でサラにじゃれ付く。

「お姉ちゃん、今からどうするの？ ご飯？」

「んー、そうですね。わたくしの作る食事と外で食べるの、どちら

が良かったですか？」

「お姉ちゃんのご飯が良いなあ。おいしいよ」

「腕によりを掛けますね。帰りに何か買っていきましょう」

イーリスの頭を優しく撫でると、サラは自分の緊張がほぐれるのを感じた。自分の一言で多くの人々が命を失うという実感。分かってはいたが、彼らの厳しい視線と部下に対する責任感の強さに思わず気を張ってしまったのだ。

人の上に立つことの重さ、それを思い知らされた瞬間でもあった。

「……サラ、次の会議までに班編成や基本的な戦術、主な魔物の攻略法などを纏めておきなさい。出来るなら、持ち込むべき荷物などもまとめておいてくれる？」

「ええ、分かっています。三日後までに準備し、持ってきますので添削をお願いします。わたくしだけでは要求する能力が高くなりすぎるかもしれませんから」

「あなたにお願いする以上、当然ね。明日か明後日に草案を持ってくるなさい」

「はい、了解いたしました」

表情を一切変えず、視線すら合わせることなく、サラとブリジットはそんな会話をする。

お互いを分かっているがゆえのこと。ブリジットは今までにない重圧を感じているサラに、あえて仕事を与えることでその重圧を紛らわせようとしているのだ。そして、そのことをサラも分かっている。

だから。

「ありがとうございます、協会長。では、失礼します」

ただ一言の礼を言い、サラはイーリスを連れて部屋を出ていく。
最後に残されたブリジットは、ただ何も言うことなくその場に留
まることしかできなかった。

第四話

三日後、再び開かれた円卓会議。

その場で全員の視線を浴びながら、サラはゆっくりと口を開いた。

「まず、お手元の資料をご覧ください。わたくしの迷宮での経験から導き出した、現段階では最適と思われる部隊編成および遭遇率の高かった魔物に対して有効と思われる戦術の一覧です。

一つの部隊は五人から八人ほどまでとし、半分が前衛、もう半分が後衛であることが望ましいでしょう。ただし、部隊を構成する人員次第ではその限りではありません。たとえば魔剣士、聖騎士などの前衛後衛どちらでも出来る者が揃っているなら半々である必要はありませんし、斥候技能に優れた者が多いなら魔物との戦闘を避けることを主眼とした編成でも構わないと思います。ただし、どんな場合でもよほどの実力がない限りは最低でも五人以上が望ましいと思います。

魔物と遭遇した場合の対処法は部隊編成によって異なるため、今わたくしの口から申し上げることは出来ません。わたくしが想定した編成での対処法、戦術は資料に記しておきましたので確認をお願いします。ただし、迷宮内の魔物は非常に強力なため、魔物の持つ甲殻などを狙っているのではない限りは戦闘を避けるのが上策です。下手に戦闘を行うと血の臭いに引かれて多数の魔物が寄ってくる可能性があるのでです」

自分も資料を手にし、サラは詰まることなく言葉を紡ぐ。

ここにいる面々はほとんどがサラよりも三十以上年上の者達ばかりだ。サラとは違って協会内の地位も高く、またどこぞの国家から高官として招聘された経験のある者も少なくない。そんな者達を前にして、しっかりと胸を張って自分の言葉を口にできること、それ

自体が評価できることだろう。

ちなみに今日サラが配布した資料は以前に円卓の面々に配られたものよりかなり詳細な情報が書き込まれている。この資料を国に売るだけでもかなりの金額になる。それはこの資料が完全に迷宮攻略を目的として作られているからだ。

サラは自分の認識する道を地図の形にして紙に起こす魔術を習得しているため、迷宮の内部でサラが通った場所は極めて細密な地図が出来上がっている。また、サラが迷宮に潜った三日間という期間は国の調査隊が潜れた期間より長く、また踏破した範囲はかなり広域だ。その地図にどこでどんなものが採取できたのかまで書かれているのだから、その価値は計り知れない。

まさかここまでの資料を出してくるとは思っていなかったのだろう。百戦錬磨の円卓の面々でさえ、引き攣った表情をしている者は少なくない。もし、これがどこかに漏れたらどうするのだろうか。

「……あー、サラ君。よくぞここまでまとめた——が、やり過ぎだ。ブリジット様も手伝ったのだろうが、もう少し情報は少なくしておいて欲しかったな。ここまでやられては部隊派遣を拒否できないか」

肩をすくめ、いかにも魔術師然としたローブを着た中年の男性がぼやく。

それを皮切りに、次々と誰もが声を上げ始めた。

「確かにここまでまとめられては文句がつけられない。こっちも志願者の表を作ってきたが、魔物がこれほどに強いと志願者の足切りを行う必要があるな。サラちゃん、このオオカミっぽい魔物、群れが平均して七匹から九匹つてのは間違いないか？」

「はい。最低で三匹、最大で二十匹を数えましたが、基本的には七

から九匹でした」

「で、罠を用いた奇襲戦法を得意とする、か。森林部で戦うにはきつい相手だな。こういうやつらには防護魔術が光るが……おうい、志願者のうち短時間で障壁を張れる連中はどれくらいだ？　うちには七人しかないぞ」

「こっちは五人だな」

「ひー、ふー、みー……十三人か」

「六人いるぞい」

「弱い入れても八人ってとこかね」

「三十九人か。サラちゃん入れても四十人。まずはこいつらを軸にして部隊編成をするべきだな。一番危険なのがこのオオカミっぽい、他にどいつに注意するべきだと思うよ？」

「鎧を纏った猪だな。攻撃が有効な頭部が完全に覆われているうえ、突撃が得意となれば一匹でも危険だ。サラ、君は圧水刃で対処しようだが、多人数で対処するにはどういう魔法が有効だ？」

「土自体はたくさんあるので、地縛などではないでしょうか。速度を緩めるか、動きを少しでも止められれば側面からの攻撃で仕留めることが可能だと思います」

「地縛は高等魔術だが……動きを止めるなら他のもいいな。確か、地面を著しく柔らかくする魔術があったな」

「柔泥地変か？　狙いが難しすぎるだろう。相手も速いんだし」

「わざわざ地面にこだわる必要もないだろう。風刃とかで足を切つてやればいい。切れなくても、足にある程度の衝撃を与えてやれば体勢を崩すだろう。それでなくとも、初撃を回避してやれば側面への攻撃の機会が生まれる。焦らなければ対処法は多い魔物だと思うぞ」

喧々諤々と議論がなされる。

既に部隊派遣が規定事項であるかのような議論だ。派遣に反対するなら今声を上げるべきだが、誰もそれをしようとはしない。表面

上はサラの熱意に打たれたという形を取っているようだが、その程度で重い腰を上げるほど甘い連中ではない。自分達の部下などと三日間散々話し合った結果、派遣を決意したのだろう。

基本的に全員の関心はどれだけ被害を減らせるかにある。元々魔術師の人数は少ないため人員を補充するには時間が掛かるし、自分の知り合いが死ぬのはいい気分ではない。

「ふむ、サラ。君の報告書には迷宮にも地上と同じく昼や夜、夕方まであるようだ。しかも、それは地上と同期していると」

「わたくしの体感ですが、そんな感じだったと思います。それがどうかしりましたか？」

「いやなに、この資料だと夜の方が魔物の動きが活発だと書いてあるのでね。まずは探索期間を朝から昼の間に限定しておけば比較的安全に探索できると思わないか？」

「なにも最初から限界まで潜り続ける必要はない。一度に多くの物は得られなくとも、何度も行くことで経験も積めるし生存率も高まるだろう。長期の探索を見越すなら、これでもいいと思うがどうかね？」

「なるほど、面白い提案だ。一度ではなく何度も挑むというわけか。確かにサラでさえも一度では攻略しきれなかった難物だ。何度も挑むのは当然の発想だな。ところでサラ、この迷宮、どれくらい広そうだ？ 探知魔術の一つくらい使ったんだろう？」

「……すみません、わたくしでは把握しきれませんでした。何をどうしてもある地点から先が反応しなかったんです。そこから先がなく、地面だというならそういう反応が返ってくるはずなんです。一切の反応がありませんでした」

「反応がない、となると魔術を無効化されてる可能性が高いか。もしかしたらサラが探索していたのは迷宮の一つの階層に過ぎんかも知れんな。とすれば長期を見越す意味は大きいかな」

「だが、時間を掛け過ぎると手柄をかつさらわれる可能性もあるぞ

？」

「何言ってるの。あの迷宮から無傷で戻ったのはサラだけで、サラと同時期に潜った連中は全滅してるのよ？ 数百人からなる王国の調査部隊をことごとく飲み込んだ場所にわざわざ乗り込むなんて馬鹿な真似をする連中なんて、しばらくは出やしないわよ。」

私達がやるべきはまず、あの迷宮攻略の取っ掛かりを作ること。後に他の連中が攻略したとしても、私達魔術師協会がいたから攻略できた、と言えるぐらいの実績を挙げることよ。誰にも有無を言わせないぐらいの実績を挙げ、その上である程度の情報を公開する。真に重要な部分は独占できれば、他は公開した方が有益だしね。」

そのために必要なのは確実性。一度の探索を短くして、何度も挑戦するという案は素晴らしいと思うわ。サラ、たとえば一度の探索時間を六時間ぐらいにしたら、初回の生存率はどれくらいになりそう？」

話を聞いていて盛り上がってきたのか、やたらと調子のいいブリジットがサラに言葉を投げる。

それを受けて、サラは即座に計算する。魔物の比較的活発でない時間に、短時間留まるとするならば――。

「生存率は七割を超えそうですね。六時間くらいなら食事の必要もないですし、いい緊張感を持つていれば更に生存率は高まるでしょう。その代わり、そう大した量の収穫は望めそうにないですが……」

「量は採取する人の数で補えるでしょ。今回派遣する人数にもよるけど、一度の探索でもサラが持ち帰った分を超えるのは間違いないと思うわ」

「確かに、サラ嬢は一人でしたからなあ。リバス・スペースという反則みたいな魔術を使えるとはいえ、体は一つだったわけで。それに一度ではなく何度も挑むとなれば徐々に効率も上がりましょう」

「ふむ、短期間での挑戦を何度でも行う、か。この方向で皆さんもよろしかったかな？ …………… 異論はなし、と。協会長、部隊編成はどうしたらよろしいか？」

「そちらで話し合ったりして決めてほしいわね。実際の人となりを見ていない私じゃ決められないわ」

「了解した。部隊派遣はいつぐらいを目処にするか、決まっていますかな？」

「ああ言っただけど、手を付けるのは早い方がいいわよね。とりあえず一週間後にここを発てるようにしておいてもらえるかしら」

「一週間後か、異論のある人は……いないようだな。では、そのように準備をさせていただこう」

「大体話はまとまったわね。細かいところは専門同士で折衝してちようだい。こういう場でやると荒れるし。内容がまとまったら、私のとこまで持ってくるように。では、解散」

パンパン、と手を叩くと円卓のみんなが立ち上がる。

その直後、立派なひげを生やした老紳士が自分の手元を見て声を上げた。

「おおっと、ちょっと待ってくれ。こちらからの報告を忘れていた。迷宮内の魔物に関する事で、やや重要なことだ」

研究部の長の言葉に、全員の顔に緊張が走る。この円卓での報告はつまり、全体への報告。全体に周知すべきことだということだ。しかし、老紳士の表情はやや明るい。悪い報告ではないのだろうか。

「朗報だが、迷宮の魔物の肉が食えることが判明した。まず色々な動物に食べさせたところ、特に異常は見られなかったのでまず私が食べてみたのだが、生臭かったりする以外には特に問題はなかった。

次に研究部の有志で食べてみたが、異常の見られるものはいなかったな。とりあえず、今回持ち帰られた魔物は全て食べられるということ覚えておいてくれ。また、いくつかの果物も食べられた。どれがどういう味がしたかは後で纏めて各位に資料を届けよう。

あと、どういうわけか同じ種類の魔物でもやたらと美味しい個体があった。リバー・スペースに入れて持ち込まれたものだし、研究部でも保存のある物品は固定式のリバー・スペースに入れているので保存状態に関しては他のと変わらないはずだ。だが、それだけは非常に美味しかった。

また、他の魔物でもたまに他の個体とは違う特徴を示した試料があった。例としては他の個体より頑強な鱗を示したものや、しなやかな体毛を持つものだな。恐らくは仕留め方に差異があったのだろうと思われる。色々な仕留め方をして、どうやれば安定してこういう素材が取れるのかを試してみたい。

「つまり、多様な戦術や多くの属性魔法を使える編成にしろということだな？　こちらでも考慮させてもらおう。有益な情報だ」

誰ともなくそう言い、手近な人物と話しながらみんな出て行ってしまう。

老紳士はまだ何か言いたそうにしていたが、すぐに肩をすくめ、部下を連れて部屋を出ていく。

あとに残されたのはサラとブリジットだけ。イーリスはブリジットの部下とお勉強しているので、ここにはいない。

「さて、それで実際問題として、迷宮の完全攻略は可能だと思う？　あなたのことから計算ぐらいはしてるでしょう？」

「正直なところ、分かりません。迷宮が複数階層に渡っているとすると、底がどれくらい深いのかによりますから。十階層くらいならともかく、百とか二百も階層が連なっているとしたら、わたくしでも攻略しきれないかもですし」

「そうね。でもやってみなくちゃわからないじゃない。それに、人跡未踏の地を制覇する、ってのは男の子なら燃えるんじゃないかしら」

「わたくしは立派な淑女……いえ、女の子です。恋に恋し——たこととはありませんが、そんな冒険よりは色恋の方が好きですよ。でも、なかなかそういう縁はないんですね」

「あなたの理想って自分より強くて、守ってくれるような男性だったわけ？そりゃ、模擬戦で『雷帝』や『氷結の姫騎士』に勝ち越すようなのより強い男なんてそうはいないでしょうよ」

「理想は高く、がわたくしの生家の家訓だったそうですから。それに、ご先祖様にはわたくしより強い方がいたそうなので、きっとこの世界のどこかにはわたくしの理想の方もいるに違いありません」

「……伝説級の連中と比べられる最近の男共が可哀そうだね。さて、じゃあ、私達もやることをやりましょうか。迷宮探索が始まる前も始まった後も仕事が山盛りだし」

「わたくしも戦闘部門の方々とお話をしてきます。今日一日、秘書さんにイーリスちゃんを任せることになっちゃいますけど、大丈夫でしょうか？」

「あの子、意外に子供好きだから大丈夫でしょ。堅物眼鏡なのに」

そう言っただけで軽く笑いあい、それぞれに部屋を出ていく。

賽は投げられた。あとはもう、進むほかない。

第五話

ガイラルの迷宮が出現した場所のすぐそばにある小都市ティエに、その日から空前の好景氣が訪れた。

数百名からなる魔術師協会の探索部隊がティエを拠点に定め、色々和買い物をしたり宿を取ったりしたからだ。また、どこからかそのことを嗅ぎつけてきた隊商がわらわらと押し寄せ、ティエやその城壁外で市を始めたのも原因の一つだろう。ついでに言うなら迷宮攻略をして名を上げようとしたが、王国の調査部隊の惨劇を目の当たりにして尻込みしていた傭兵や領地を持たない騎士も動き始めたことも無関係ではないだろう。

ただ、傭兵や騎士達はまだ様子見の段階だ。国の大部隊でさえ飲み込まれた迷宮に、魔術師協会がどれだけ立ち向かえるかお手並み拝見を決め込んでいる。

そういう意図を知ってか知らずか、魔術師協会の探索部隊は準備を終え、今まさに迷宮への挑戦を始めようとしていた。

「最後の確認だ。全隊、機械式の時計は持っているな？ 正確に動いているな？ 今から六時間後が探索の期限だ。それ以降は魔物が活性化する危険な時間になる。六時間をいっぱい使う必要はない。ある程度の植物鉱物や魔物の爪、甲殻などが集まればいつ戻ってきてもらっても構わない。」

今回優先すべきことは生き残ることだ。採取行動は生きてさえいれば再び行っことが出来る。それに、どうせ内部の資源についての知識など我々にはまだ蓄積されていないので、どれが希少でどれが希少でないのかなど分かるわけがない。なので、もし採取行動中に魔物に襲われたら即座に魔物への対応に移れ。我々はここに死にに来たわけではないのだからな。

——よし、では準備の出来た部隊から迷宮へ突入せよ。諸君らの健闘を期待する」

四十半ばほどの体格のいい男性が整列した部隊の前でそう言う、半分以上の部隊が速やかに行動を開始する。残りは荷物の整理などに手間取っているのか、少しずつ出発していく。

そんな人々を見てから、最後列にいたサラは迷宮の地上部に目を移す。

どんな材質で出来ているのか分からない、巨大な構造物。人々を飲み込んでいく出入り口は巨人が入ることも想定しているのか高さは三十フィートを優に超え、幅は五十ヤードもあるだろうか。その入り口の巨大さに違わず、迷宮の地上部自体もかなり大きい。見た感じでは城ほどの面積がある巨人族の神殿というところか。

柱や壁、天井、床を構成するものは石と鉱物の中間のような材質で、その強度は人智を超える。調査隊壊滅後、顔に泥を塗られた王宮が迷宮自体を破壊しようとする手尽くしたが、どうやっても傷一つどころか煤一つさえつけることが出来なかったという。実際、サラもちよつと挑戦したが、圧水刃に代表される強力な物理的破壊力を持つ魔術でさえも傷一つ付けられなかった。

それにしても改めて見ると実に壮大な建造物だ。傷も付かないような素材をどうやって彫ったのかは分からないが緻密で繊細な彫刻がなされていたり、柱の配置も計算され尽くした美しさを見せている。巨大なだけではなく壮麗さをも持ち合わせているところが人を引き付けてやまないのだろうか。

などと考えていると、クイとサラの服の袖が引つ張られた。

「用意出来たみたいだよ」

「そうですか、ではわたくし達も出発ですね」

袖を掴むイーリスに笑いかけながら、サラは後ろを振り返る。

そこにいるのは五人組の部隊だ。魔術師協会でも珍しく部隊の半分以上が人族ではない。人族が二人に魔族、神族、猫系統の獣人族が一人ずつという構成だ。ついでに言うなら超がつくほどの美形揃いである。

それにしても少し前から知っている顔が見えるのは何かの縁だろうか。

「サラさん、これからお願いしますね」

「ええ、頑張りますよ」

話しかけてきたのはクレールだ。クレール・マリエツト。書類で確認して初めて知ったが随分といいところのお嬢様らしく、またそれとは関係なく魔術の才能もあり、協会でも将来を嘱望されているらしい。

というか、この五人は誰も彼もが協会としては未来の幹部候補であるようだ。男女比が一对四という逆紅一点の状態を見ながら、サラは内心でため息をつく。押し付けられた、と。

一般的にみると邪魔にしかないイーリスも同行するとはいえ、サラがいるならどういう状況であっても生存することは間違いない。極力手を出さず、ヤバそうな時だけ手を貸せと言われているが、それはつまり尻拭いをしろということだ。重傷を負わせることなく成功体験を植え付けろ、と暗に言われているに等しい。

サラも一応はその思惑を持つ上層部の一員のため、その憂鬱さを表に出すことはない。優秀だというのなら協会の発展には欠かせないし、若いうちから色々な経験をさせるのは当然のことだからだ。

「んじゃ、行こうか。持ち帰った量でなんか給金が出るらしいし、一番を狙いたい」

「ええ。いいものをたくさん持ちかえれば、その分追加で報酬も出るそうだしね」

人族の少年剣士に、魔族の魔術師が賛同する。

それを見て、サラは「うん？」と眉根を寄せた。何故、魔族の少女は僅かに位置を移動した？ 剣士の少年が立ち上がるまでは少年と荷物を挟んだ位置にいたのに、いつの間にか隣に立っている。ついでに不思議と言えば、何故他の美少女三人は悔しそうにしている？

黙考五秒、サラは一つの答えを見つけた。分かれば単純な話だ。つまり、この剣士君が非常にモテるのだろう。

分かれば問題はない。いちいち下らない恋の鞘当てに巻き込まれるのも面倒なので、早々に自分の立ち位置を決めてしまう。

「では、わたくしたちは最後尾にいますので、どう進むかなどはお任せします」

「一番後ろってことは、後ろからの魔物を引き受けてもらうことになるけど……大丈夫？」

「はい。同行させていただくわけですから、この程度は引き受けさせていただきます」

いつもの笑みも見せず、サラはあっさりと言う。この中でサラの実力を知るのはクレールだけのため、方々から心配そうな視線などを向けられるが、それをサラが気にすることはない。どうせいつものことだ。

まあ、彼らも面倒な後方への警戒を外部からの人員がやってくれるなら文句はないのだろう。不安そうにしながらも、それ以上何か言うことはない。

「よし、じゃあしゅっぱーっ」

少年の号令とともに全員が歩き出した。

巨大な入り口をくぐり、その先で大口を開けている地下への階段

を目指す。

サラにとっては前回の生き帰りを合わせて、三度目の内部の光景だ。静謐にして神聖不可侵。だだっ広い空間のど真ん中に、ただ下へと降りるための階段があるだけの場所。今は探索部隊司令部の魔術師が使った長時間維持できる光の魔術があるために明るいが、サラが最初に来た時は真っ暗で何も見えなかったものだ。

そんなことを思いつつ、サラはイーリスの手を引きながら歩く。

一番後ろだと、部隊の人員がよく見える。まだこの場所は魔物が出てこないと分かっているためか、気を抜いていることまでよく分かっている。

ガチガチに緊張しているよりはいいか、と軽く吐息し、サラは頭に叩き込んだ資料を思い返ししながら彼らを観察する。

一番目を引く赤毛のつんつん頭の少年がこの部隊の隊長で、名をアラン・ドゥーセ。凛々しい面立ちの美少年で、確かに潜在する魔力はかなりの物だと言えるだろう。だが、今はまだその全ては発現していない。資料にはまだ未熟な体が無意識に自分の魔力に封をしているのだろうと書いてあった。それに結構周囲のことをよく見ているようで、今も躓きそうになった神官服の少女を抱き止めていた。モテるわけだ。背も年の割には高い。六フィートに届くか否かというところだろうか。

アランの少し後ろを歩くのがクレール。美形揃いの面々では一番地味だろうか。ただ、体の凹凸は彼女が一番だ。サラは今まで気にしたことはなかったが、思わず嫉妬してしまいそうぐらいに大きな胸は目を引く。そのくせ腰は細いという。女のサラでも彼女の体型には目を見張るのだ。男ならもう飛びつきたくなりそうなものがある。

転びそうになって抱き止められたのは神族の少女で、この部隊ではサラを除けば唯一の回復魔術の使い手であるルナ・クロードだ。この部隊では一番年若く、サラと同じ年だという。優しい面差しの少女で、まさに天使もかくやという美貌の持ち主だ。銀系のよう

な長い髪は結い上げられて、フードの中に隠されている。

先ほどみんなを出し抜いてアランの隣に立った魔族の魔術師はミラ・ランドバーク。この王国出身ではなく、他国でその才能を見出されてやってきた英才だ。やや攻撃に偏ってはいるが強力な魔術の使い手らしい。勝気そうな顔立ちの美少女で、魔術師の標準装備であるローブではなく体の線を出すような挑発的なドレスを着ている。サラの見立てではこのドレスはかなり強力な魔道具のようだ。歩いても全く足にまとわりつかないところを見ると、動きやすさも兼ねているのが分かる。

最後に、遙か異郷の地から来た獣人の少女で、カザネ・イガラシだ。一目見て動きやすそうだと分かる軽装で、防具らしい防具など胸に着けた革鎧と肘や膝を保護する革の防具ぐらいか。見た目通り、斥候技能に優れているらしい。この辺りでは珍しい黒髪黒目で、本人も大人しめの美少女なので結構人目を引く。

実に個性的な面々だ。出来れば日常では関わり合いになりたくない。

サラはそんなことを考えつつ、ゆっくりと術式を構成していく。術式とは魔術の設計図のようなもの。術式に間違いや欠損があれば魔術は十全に機能せず、時には暴発して術者のみならず周囲をも傷つけてしまう。それを避けるにはやはり基本だ。基本に忠実に、サラは術式を編み上げる。

行使する魔術は広域索敵魔術。それも長時間維持できる型のものだ。少々魔力の消費は大きいが、サラの魔力量ならば広めのリバー・スペースを展開していても充分まかなえる程度。戦闘にも支障は出ない。

「——天網」

階段を下りると同時に、サラは魔術を発動させる。瞬間的で強力かつ広範囲の発動。これに気付くことは熟練者でも難しいだろう。

索敵術式に掛かる魔物の反応は、懐かしいとでも言うべきだろうか。意識を集中すればどれがどの魔物かまで判別できるのは、前回の経験が生きているからだろうか。

何百段もある階段を下りているうちに閉じていた目を開ければ、地下とは思えない光景が眼前に広がった。

地上にも負けぬ太陽が迷宮全体を照らし、茂る木々の葉が多くの木陰を作る。

頑強な石畳が道を作り、その脇に背の高い木々が並び、木の下には灌木や草が生えている。植物は青々とした葉を広げており、どれも地上では見られない種類ばかりだ。

思わず感動しそうになる光景だが、美しいばかりではない。灌木が持つトゲには毒があり、また視界を遮る植物が魔物の姿を隠す。入り口周辺の魔物は既に先行した部隊が始末したのだろうか。周囲に魔物の反応はない。少々の血の臭いと死体を焼いたと思われる焦げの臭いが鼻をつくのは、まあ許容するべきことか。

前で何やら相談しているアラン達を放っておいて、サラはイーリスに目をやる。

ほぼ間違いなく、イーリスはこの迷宮で生まれ育ったはずだ。何か思うことはあるだろう。

そう思っていたが、イーリスは初めてこの光景を見たかのように目を輝かせてきよろきよろしていた。

「イーリスちゃん？　ここ、貴女の故郷でしょう？」

「ううん。前のわたしはそうだったけど、今のわたしはお姉ちゃんの家で生まれたの」

「——名付け、のせいですか」

「分かんない。でも、わたしはお姉ちゃんのこと、好きだよ」

「そう、ですか。わたくしも、イーリスちゃんのこと好きですよ」

ただただ笑うイーリスに、サラは少しだけ救われていた。

数多くの命を奪い続けてきた、血で塗れた両の腕。その手が掬い取ったこの少女、イーリスは果たして幸運だと言えるのだろうか。あのまま魔物に食まれていた方が幸せだったのではないか、そんなことさえ頭をよぎることがある。

だが、イーリスは笑っていてくれる。それだけが、サラにとっての救いだった。

「おい、進むからついて来てくれー」

アランの声に我に返り、サラはイーリスの手を引いて歩き出す。

戦闘では圧倒的な実力を誇るサラも、日常ではまだ隙があるようだった。

第六話

迷宮内を探索する最中、時折サラはぱちんと指を弾く。

別に気取った構えで弾くわけではない。イーリスの手を引いているのとは逆の、右手の指を歩いている最中に弾くだけだ。

なぜそんなことをしているのか、理由は簡単だ。サラの索敵範囲に引っ掛かった後方にいる魔物に攻撃魔術を叩き込み、その死体をリバース・スペースに回収しているのである。別に前のアラン達に気付かれても構わないのだが、わざわざ教えて危機感を抱かせることもないだろうという気遣いだ。目視や直感だけに頼らざるを得ない彼らに、無駄な緊張を強いるのは心苦しい。一応、気付いてなさそうな側面後方の魔物も始末し、回収してある。

実は指を弾く必要はないのだが、合図のようなものがあつた方が魔術を発動させるのに便利なのだ。なので、手間もかからないこの方法を使っている。

魔術を発動はさせているが、はるか遠距離での発動のためサラが使っているとはばれないだろう。常識として魔術は術者の近くからでしか発動できないと思われるからだ。実際には遠距離でもキンと術式を編みさえすれば発動可能なのだが。

それにしても意外と魔物が襲つてこない。サラが常時使っている魔術は索敵術のみで、魔物を遠ざける魔術など一切使っていない。彼らに戦ってもらつた方が経験を積めていいからだ。もしかしたら、どこかの部隊がある程度近くで大立ち回りを演じているのかもしれない。

とはいえ、襲つてこないだけで近くに魔物の反応はある。ただ襲うための準備を整えきれていないのだろうか。そういえば頭上から落ちてくるカタツムリのような魔物は、樹上から落ちてくる形以外の遭遇はなかった。案外必勝の手管以外では襲つてこないのかもしれない。

実際には違うのかも知れないが、考慮には値することだ。索敵の精度を高めることで、少し調べてみよう。

頷き、サラは行使中の魔術の索敵深度を上げる。長時間行使するには向かないが、今回は六時間程度のためサラの魔力保有量なら全く問題はない。

と、そのとき、サラの感知範囲に魔物の群れが侵入した。

数は七。大きさは口バほどもあるか。間違いなく一つの意志で統率された群れだ。つまり、魔術師協会での円卓会議でも話に上がったオカミっぽい魔物、作戦部がガイラルウルフと命名した魔物だ。危険度は極めて高い。高速で恐ろしく小回りの利く機動力と鉄製の鎧さえ容易く噛み砕く顎の力を備え、爪を振るえば鋼鉄の盾さえ挟り取る。それだけでも脅威だが、群れでの連携を仕掛けてくるのだから始末に負えない。

サラ個人なら一切問題はない。索敵は完了しているのでどこにいるのかまで分かっている。なので、先制して遠距離から範囲攻撃の連打を叩き込めばことは足りる。

だが、今回は手助けは最小限に言い含められている。それにこの相手に対処しきれなければ、どうせ遠くない未来に死ぬ。

そのため、サラは何も言うことなく彼らのお手並みを拝見することに決めた。ただ、サラやイーリスを優先的に狙ってくるようならば即座に手を打つが。

静かに戦意を高め、イーリスの手を強めに握ることで注意を促す。距離はあと二百ヤードほど。ガイラルウルフの速度ならば、この迷宮の灌木の中を通っても十秒とかかるまい。

と、サラが厳しい表情になった時だった。

ピク、とカザネの耳が動く。そして、携えていた短弓を抜いて矢を番え、鋭い声を上げる。

「来る。前からっ！」

その声に反応し、即座に全員が陣を組む。前衛にアランとクレール、中衛にカザネ、後衛にミラとルナ。迷宮の石畳はそこそこの幅があり、三人程度なら並んでも充分に戦えるほどの余裕がある。だから、魔物も石畳の道を通ることが多い。が、何事にも例外はある。それがこのガイラルウルフだ。

サラは目を細め、障壁魔術の用意を始める。アラン達が無防備に側面からの攻撃を受けた時の保険だ。

ガイラルウルフも待ち構えられているのが分かっているのだろう、群れを幾つかに分けたようだ。流石に知能が高い。

しかし、カザネの目と耳はそれを捕捉していた。前方から真っ直ぐに駆けてくる二頭のガイラルウルフに矢を射かけつつ、声を上げる。

「側面から来る！ 防護術を！」

「っ！？ 弾け、全てを。衝転壁！」

ルナが慌てつつも賞賛すべき速度で魔術を発動させ、両側の石畳と木々の境目のに不可視の障壁を展開する。どこから来るのか分からなかったからか、かなりの範囲を覆う巨大なものだ。魔力の消耗は相当だろう。

それに遅れて、鈍い音が連続して響く。ガイラルウルフが力を反転して弾き返す力を与えられた障壁にぶつかったのだ。予想もしていなかった壁への衝突と、自分達の強靱な足腰から繰り出される体当たりをそのまま返された衝撃は大きいだろう。しばらくは困惑と痛みで動くこともできないはず。

続き、クレールが極小の術式を展開し、同時に突撃する。人間を上回る身体能力を持つガイラルウルフに対しての接近戦は危険だが、しかしクレールには必勝の手管を有していた。

「烈光！」

言葉と共に、爆発的な光が発生して網膜を灼く。

発動前に出されていた合図で目を閉じたアラン達とその程度の光など苦にしないサラ、ついでにサラが咄嗟に目をふさいでいたイリスは無事だが、真正面から強烈極まる光を浴びた二頭のガイラルウルフは甲高い悲鳴を上げて悶絶してしまう。

戦闘において致命的な隙を晒した二頭にトドメを刺し、クレールは猛烈な速度で迫り来る一際大きなガイラルウルフを迎え撃つ体勢を取った。

だが、どんなに身構えても人間を遥かに超える重量と敏捷性を備えた巨狼を、盾も持たぬクレールが受け止められるはずもない。そも、細身で体重の軽いクレールに攻撃を受け止めるなどという真似が出来るわけがない。

クレールはただの囃。本命は別にある。

それを知るのはクレール達だけだ。襲い来るガイラルウルフがそんなものを知っているわけがない。

唸り声を上げてクレールに飛び掛かるガイラルウルフ。極めて巧妙に地を這うような軌道でクレールを襲う。上に跳んでも躲し切れず、左右では爪に切り裂かれてしまっだろう。

ただし、クレールの位置まで到達出来ればの話だが。

必中にして必殺の攻撃は、しかし一瞬でクレールの脇を駆け抜けたアランによって阻まれる。瞬間的に限界を超えた強化を施し、ガイラルウルフの体を大上段からの一振りで両断したのだ。

そのことに、ちょっとばかり驚くサラ。あまり強そうには見えなかったが、よくもまあこんな真似が出来るもんだと感心する。

が、すぐにサラは横へと目を移す。ようやく立ち直ったらしい側面から攻撃を仕掛けてきたガイラルウルフが、魔術の壁を迂回し始めたのだ。

オオカミのはずなのに軽快に木を駆け上って壁を跳び越えようとするもの、大きく回って壁の前後から襲い来ようとするもの、この

状況でもまだ諦めていないようだ。

前衛が前に突出している状況だが、彼女らに焦りはない。上から襲い来る個体を力ザネが撃ち落とし、ミラが影の刃で前に回りこもうとしていた二頭を切り分かつ。

見事な手並だ。この年齢にしては驚異的というべきだろう。なるほど、未来の幹部候補とは名ばかりではないらしい。

笑い、サラは囀るように口を開く。

「風裂刃」

彼ら五人が唯一討ち漏らした一頭、後ろから回り込んできた個体を風の刃が微塵に引き裂く。どんな制御をしたのか、素材として重要な頭部と脚部には傷一つ付けていない。

見もせずに行った超絶の技巧だが、それを見ていた者は誰もいない。というか、自分達のなした初めての戦果に酔いしれているのか、ほとんど無防備な状態だ。

牙や爪の回収にも時間がいるため、サラは周囲三十ヤードほどに魔物を寄せ付けない結界を張る。協会でも高い危険度を持つと判断された魔物を撃退したのだから、少しくらいはご褒美として手伝っても構わないだろう。

「イーリスちゃん、わたくしはこのオオカミの牙とかを剥ぎ取っていますので、その間にこの周りの植物で何か良さそうなものを取ってきていただけますか？」

「うん。わたしが選んでいいの？」

「ええ。その方がいい結果になると思います」

そう言って、サラはイーリスに袋を渡す。適当に持ってきた革の袋で、そこそこ大きなものだ。植物にはサラよりもイーリスの方が詳しいため、機会があればイーリスに採取してもらうために用意し

たのである。

自分の周囲の植物から何かを聞くことでかなり迅速かつ的確な採取を行うイーリスを見て、サラも気合を入れ直す。

魔物から牙などの素材を剥ぎ取るために持ってきたナイフを取り出し、ガイルウルフの死骸に近づく。かなり生臭いが、問題は無い。牙を折るのではなく、鼻先から顎自体を切り出す。頑強な骨は並のナイフでは傷さえつかないが、魔術で切れ味を高めたナイフのため問題なく切断できる。

一息に牙を顎ごと切り取ったら、次は爪だ。これは剥ぎ取るのが面倒なので魔術で処理をする。必要な部分を保護し、後は丸ごと焼却すれば一丁上がりだ。

ボツと音を立てて一瞬だけ燃え上がり、すぐに灰と化したガイルウルフの死骸から爪を取る。そして、拾い上げた爪から灰と煤を叩き落としたサラは、一番近くにいたルナに近づいていった。

「これも貴方がたの戦果です。どうぞ」

「あ、ありがとう。でも、いいの？ こっちの取り分になっちゃうけど」

「わたくしはどれだけ採って帰っても固定の金額しかもらえませんので」

爪と牙をルナに押し付けたサラは、軽く周囲の様子を確認する。

この辺りにはサラの結界があるために魔物は近付いてこないが、どうも森がざわめいている気がしたのだ。

遠く、感知範囲外で何かが起きている。そんな気がしてならなかった。

時間になったので迷宮から出ると、大半の部隊が神妙な顔をして何事かを話し合っていた。

何やら深刻な事態が起きているのかもしれない。

ずっとサラの目が細められたとき、迷宮から出てきたサラ達に気付いた数人が近付いてきた。

「お、そっちは無事だったのか」

「何があっただ？」

「魔物だ。資料にはなかった、恐ろしく強い魔物が出てきたらしい。部隊が一つ壊滅して、一人しか生き残れなかったみたいだ。襲われたのは一つの部隊だけだったみたいだが、念のため調査隊を出すそう。次の探索はその結果待ちだとさ」

「他は大丈夫だったのか？」

「襲われたのはその一組だけみたいだ。資料の地図に描かれてなかった範囲に足を踏み入れたのが不運だったな」

近付いてきた誰かと親しげに話すアラン。

その彼らのやり取りを聞いて、サラは齒噛みする。もう少し入り口近辺からつながる周辺を念入りに調べておくべきだった、と。所詮は個人でしかなかったサラがああ短い時間でこの広大な面積を誇る階層の三分の一を踏破し、調査出来たのは賞賛に値することだ。だが、やはり個人は個人。たった一人で全体を網羅するにはあまりにも時間が掛かりすぎる。

仕方のないことだが、まだ幼いと言えるサラに割り切ることは出来ず、重苦しい息を吐き出すことしかできない。

「すみません、わたくしは用事が出来ましたので少し抜けます」

「あ、はい。多分、今日明日は宿にいますと思うから、用があったら

来てね」

「ええ、用がありましたら。では、行きます。イーリスちゃんも来てください」

ほんの少し親しくなったルナに断り、サラは目的地を目指す。身を焦がす悔恨を理性で抑え込み、即席の天幕を張っている迷宮攻略本部へと赴いた。

用事は一つ。許可を得ることだ。

「すみません、今回の魔物の件で——」

「しかしだな、全部あの子に任せるわけにもいくまい？」

「それでも、サラちゃんが我々の最大戦力であることは動かしようのない事実。今は不安要素を取り除くことに努めるのが我らの仕事だろう」

「だからと言って危険だと分かっていることを年端もいかぬ少女に任せきりにすることをどう考える！？ あの子は強いがそれでも不覚を取ることはいえるだろうに」

「任せきりにするなどとは言っていない。一時的な措置だ。広域の索敵術式を使い続け、かつ弱点を探せるほどに豊富な攻撃の種類を保有するのは現時点で彼女しかない。分かるか、現時点では、だ。迷宮の構造を調査し、錬金部が有効な武具を開発すればいずれは他の部隊で対処できるようになる。それまでの一時凌ぎなのだ。

情けないが、それ以上の手段を我々は持たないことを自覚しろ。なんなら、貴様が挑んで餌になってくるか！？」

天幕に足を踏み入れたサラが見たのは、殴り合い寸前の話し合いを行う二人の男性の姿だった。

どちらも言っていることは正論のため、誰も口を挟めない。効率を重視して負担を優秀な一人に負わせるか、効率を捨ててでも全員が等しく負担を背負うか。

中での話し合いがどうあれ、サラの答えは出ていた。

「すみません。今回の魔物の件で、わたくしに出撃の許可を頂きたいのですが」

静かな声音。しかし、その言葉に込められた強さに天幕の中が静まり返る。

魔力を用いたわけではない。大声を出したわけでもない。語気を強めたわけでも、甲高い声を出したりしたわけでもない。

それは言うなれば意志の強さ。激情に駆られるでもなく、義務感からでもなく、自分の意志で自分のやるべきことを選び取ったが故の強さ。

サラのそんな言葉に圧倒されていた人々が、数秒を経てようやく動き出す。目的は一つ、サラに今回の件の情報を提供することだ。

「……すまん。奴らの持ち帰った地図を渡す。赤い点が打つてあるところが遭遇地点だ。件の魔物は周囲の木々に負けないほどの体高の、二足歩行の爬虫類型らしい。移動速度はあまり速くないようだが、攻撃は異常に速かったと言っていた。今の段階ではこれ以上の情報はない」

「それだけの情報があれば充分です。とりあえず試料としてその魔物の死骸を持ち帰ります。そうですね、一時間もあれば戻ってこられるでしょう」

「では、正式に許可と依頼をサラ・セイファートに出す。本当に、すまない」

「頭を下げないでください。これがわたくしの仕事ですから」

ただただ申し訳なさそうにする人々に、サラは微笑を残す。そして。

「イーリスちゃん、ここでお留守番しててくださいね。みなさん、この子を少しの間お願いします」

イーリスの髪を撫でたサウは、風のように天幕から姿を消した。誰も、何も言えぬままに。

第七話

絶望的な体格差。覆しようのない体重差。身を覆う鱗は鋼の切っ先すら通さず、強靱な爪は大樹すらもなぎ倒す。

動きは鈍重にして俊敏。走るのは遅いのだが、爪や牙による攻撃は常人では視認すら不可能な速度を持つ。

生半可な實力ではその前に立つことさえ不可能。高位の魔術師であつても接近された時点で死が確定するほどの強敵。襲撃を受けた部隊は不幸だったと言うほかない。

地上の魔物では古代種以外に並ぶものなき暴風のごとき攻撃を全て紙一重で躲し、サラは拳を振るって応戦する。

圧倒的とさえいえる暴威を前にし、少女の小さな拳がなんの役に立つだろうか。周囲の大きな木にも負けぬほどに巨大な二足歩行のトカゲが纏う血の色にも似た鱗は鋼よりも強靱なのだ。人間程度の臂力では蚊に刺されたほども感じはしまい。

そう、普通ならば。

人間の限界など軽く通り越した身体強化を行うサラは普通という範疇には収まらない。絶対的なまでの差を桁外れの魔力に物を言わせて覆す。

力まず、焦らず、滞らずに放たれる一撃。凄まじい基礎鍛錬を発射台として放たれたそれは、過剰なまでの強化と相俟って攻城兵器の如き威力で以って魔物を打つ。

恐るべき威力を身に受けたトカゲは血反吐を吐いて飛び退く。見れば、腹部が著しく陥没しているのが分かるだろう。強烈な衝撃が鱗を貫通し、筋肉を裂き、骨を砕き、内臓へと損傷を与えた証拠だ。並の魔物ならこの時点で戦意をなくして逃亡を始めるだろう。だが、このトカゲは並ではない。恐らくはこの第一階層の覇者。竜種にさえ匹敵する強者なのだ。

とはいえ、たった一撃で甚大な傷を負ったことは間違いない。接

近戦では勝ち目のないことを悟ったトカゲは大きく息を吸い込み、嫌に耳に障る咆哮を上げた。

サラはその咆哮と同時に四肢が僅かに痺れたのを感じ取る。

咆哮による神経干渉か。この干渉強度なら神族や魔族にも通用するだろう。肉体への依存度の高い獣人なら半狂乱に陥りかねない。

まさか一番最初の階層でこれほどの魔物が存在するとは。サラは自分の認識が甘かったことを反省し、自分に食らいつこうとしているトカゲを睨み付ける。

そして、油断しているトカゲの横っ面に強烈極まる上段蹴りを叩き込んだ。

確かに優秀な神経攻撃である。身体能力を強化して戦う者にとっては天敵といってもいいだろう。素の戦闘能力も非常に高く、おそらくはこのトカゲ一頭を相手にするだけで軍隊が必要になる強さだと言ってもいい。

このトカゲにとって誤算だったのはサラが高いのは身体能力や魔力だけではないことだ。そう、こんな迷宮に単独での侵入を許されるということは、どんな状況に陥っても解決する手段を保有しているということである。当然、神経干渉などの行動阻害系としては普遍的なものに耐性を持っていないわけがない。

「終わりです」

神速で繰り出される踵落としては雷の如き無慈悲さでトカゲの頭部を粉碎する。先に放たれた拳よりも更に強力な一撃だ。トカゲの頭部は完全に原型を失っており、その体も軽く痙攣するだけで動く気配はない。

再生能力を持っているといけないので、しばらくその場で観察する。数分と経たず痙攣すらおさまったのを確認し、サラはトカゲをリバース・スペースに入れて深く嘆息した。

今回の被害は一組だけだったが、もし纏まっているところを襲撃

されていたら更に大きな被害が出ていただろう。索敵術式の反応からして、この辺りに他の魔物は寄ってこないようなのでその点だけは安心だが。

しかし、と吐息し、サラは周囲を見渡す。

今サラが倒したトカゲは他の魔物とは隔絶した強さを持っていた。強い番人がいるところにはいいお宝があるというのが相場である。まあ、単にトカゲがここを縄張りに行っているだけかもしれないし、トカゲの爪や牙がお宝かもしれないが。

目を伏せたサラは、とりあえず周辺を調べることにした。

「少し、精査しましょう。——全ての智をここに。我は智の蒐集者。我の目の届かぬ場所はなく、我の手の届かぬ場所はない」

凄まじい精密さの術式が織り上げられていく。その緻密さたるや魔力の糸で布を織り上げるかのようなうだ。生半可な制御力ではない。才能に胡坐をかくのではなく、常に自分を高めてきたがゆえの技巧だ。

消費する魔力量も半端ではなく、並の魔術師ならば多くの魔石を用いるか大人数での儀式として行すべき魔術。術の存在自体が各々の一族などに秘匿されているような奥義の類である。

ゆえにその効果もサラが普段使うようなものとは桁が違う。文字通りの精密探查魔術だ。

「神眼」

伏せていた目を開けると、サラの視界そのものが一変していた。常より広い視野で、目に映る物質・非物質を問わない全ての情報が頭に流れ込んでくる。絶対的な知覚能力の付加だ。慣れていない者では十秒ともたずに酔って倒れるほどの情報量。それを多少顔を青ざめさせる程度で全て把握し、掌握するサラの情報処理能力は異

常と言ってもいいだろう。

加えて言うなら、この大魔術を使っている状態でさえサラは周囲への警戒を怠っていない。魔物が危険領域に入ったら即時迎撃できるだけの備えをしているのだ。

それだけの備えを出来るため、こういう役回りをしているともいえるのだが。

時間にして約一分ほどもじっくり周囲を観察したサラは、一つ頷いて真っ直ぐに道なき道を進んでいく。

今の魔術で大体この辺りの地形は把握した。サラがトカゲと戦っていた道はどうも輪になっており、広い空間を囲んでいるようだ。輪と言っても曲がりくねったりしている上かなり広いため、きちんと地図を記していないと分からないようにできているようだ。

その輪の中心、囲まれている場所に入るには木や灌木をかき分けて行かなければならない。あのトカゲはここを守っていたのだろう。いやに繁茂した背の高い草をかき分けた先で、サラが見たのは一つの石碑だった。

広い、本当に広い空間の中、ただ中央に座すたった一つの石碑。石畳もないのにこの場所だけは木々が生えていない。柔らかな草が芝生のように地面を覆っているだけだ。

静謐な空気に包まれた場所。騒ぎや血でここを汚すのが躊躇われるような神聖さがある。

なので、サラは静かに石碑へと歩み寄った。

バタバタと走るような無様な真似はせず、ただただ歩いて。

石碑の前に着いたら、深く一礼する。それから石碑に掛けられている字を読む。古代語、それも上位古代語と呼ばれる神代の文字だ。サラでなければ辞書と睨めっこしながら読むことになったであろう文字である。

——遙か遠き者達へ。

未来を汝らへと託す。

大いなる災厄をここに封ずることしかできぬ我らを呪ってほしい。

「……大いなる、災厄？ 何かとんでもないものがこの奥深くに存在するということでしょうか」

軽く首を傾げたサラは常に持ち歩いている紙を一枚取出し、石碑の文字を正確に写し取る。

三度ほど自分の字と石碑の字を見比べたサラは一つ頷いて石碑に背を向けた。

あまり長居していい場所ではない。ここはきっと、墓所のようなものだから。

静かに広間を出て、トカゲと戦った道まで戻ったサラは先ほどの探查魔術で発見したいくつかの物を回収するために動き出す。

この地で散った協会員達の遺品。無いよりは、ある方がいいとそう信じて。

宣言通り一時間と立たずに帰還したサラは、驚愕と恐怖の視線で以って迎えられた。

当然か、右拳と踵にのみ血の跡を付けただけでそれ以外はほとんど汚れすらしていないのだ。六人からなる部隊の五人までが抵抗すらできずに潰された魔物を相手にして、毛筋ほどの傷も負っていないというのは化け物と言うほかない。

なんら負の感情を抱いていないのはイリスぐらいか。サラの實力を知っている者でさえ、これほどまでの隔絶を目の当たりにすれば絶句するほかないのだ。

「トカゲを倒し、とりあえず丸ごと持ってきました。あと、死体は見つかりませんでした。が、犠牲になった部隊の遺品は見つかりましたのでそれを回収してきました」

提出します、と付け加え、サラは拾ってきた遺品をどさどさっと机の上に置く。

誰かの肖像が入っていると思われるロケットペンダント、何かのエンブレム、内に想いを秘めたタリスマン、剣が数本、盾が二つ、杖の本体である宝玉、指輪、その他諸々。

藪に散らばっていたものの中でも、所有者が分かりそうなものを見繕って持ってきたのだ。本人の破片も散らばっていたが、流石に原型を留めていないどころか文字通りの破片だったため回収していない。指一本とかを持ってきたても誰の物か分かるわけもないのだし。なので、一か所に集めて光と火の複合属性魔術で火葬しておいた。この辺りは言う必要がないため口にはしないが。

「……遺品の回収までしてくれたか。どうだった？ 件の魔物だが、君以外でも倒せそうか？」

「現時点では難しいと言わざるを得ません。また、魔物はある石碑を守っていました。その石碑の記述も提出しますが、少し気になることがあるので明日以降も続けてわたくし単騎ないしイーリスちゃんと二人での出撃の許可を頂きたいです。下手すると、今回のトカゲは複数存在するかもしれないので」

「こちらとしては死んでくれさえしなければ何をやっても構わないが……大丈夫か？ この速さで討伐し、回収まで行っているということは移動などに強い魔術を使っているはずだ。今日ゆっくり寝ただけで回復できるのか？」

「問題ありません。わたくしは通常の呼吸さえ出来れば、一定量の魔力を回復し続けることができます。既に消費した魔力の大半は回復を終えました。あと数分で魔力自体は完全に回復できるでしょう」

自分の魔力量を調べつつ、サラは断言する。これは驚異の回復力だ。普通でも呼吸、食事、睡眠などで魔力量は回復するし、大幅に回復しようと思えばいくつか方法もある。だが、普通の呼吸だけでは一日続けても魔力総量の一割も回復できない。それなのに呼吸だけで充分以上の魔力回復を行える、というのはそれだけで一つの武器だ。技術でも体質でも、他からすれば垂涎の対象になるだろう。

サラにとってはそんなことはどうでもいい。必要に迫られたから習得しただけであって、他に手段があればそちらを使えばいいのだし。

「大したもんだ。まあ、問題ないなら、許可を出そう。ただ、やることはちゃんとやってくれよ。荷物もまとめてあるし、転移術者も準備が終わってる」

「はい。皆さんが持ち帰ったものは、もう一覧にまとめ終わってるんですか？」

「それが我々の仕事だからね。まあ、採集してきてもらったものを部隊ごとにまとめて、それぞれ番号振っただけだから大した手間でもない。転移を担ってもらってる術者の方がよほど大変だろうな」

「そんなものですか。では、わたくしは荷物を回収後、術者の方と共にトゥローサへ帰投し、荷物を引き渡したのち帰還します」

「頼んだ」

一礼し、サラはイーリスを連れて天幕を出て、採集物の集積場所へと向かう。

天幕の裏にある縄と杭で囲まれた場所には、よくもまあこれほどの量を集めたものだ、と感心するほど多くの採集物であふれていた。中身を確認せず、サラは囲まれた場所にある物をそのままリバー・スペースの中へと落とし込む。このままの状態で向こうへと運べばいいので、サラが確認する必要はないのだ。

その光景を見ていた転移術者三人は驚いたように口を開けたまま固まってしまふ。まあ、リバース・スペースの行使を初めて見た者は大体こういう反応を返してくるので、サラはもう慣れっこだが。

「転移をお願いします」

サラが笑みを向けると、転移術者達は慌ててサラの近くに来て詠唱を始めた。

「此方と彼方を結ぶ道よ、開け」

「我らは道を開くもの」

「我らが理に従い、空を通じて彼の地へと至らん」

三人の術者による連鎖詠唱。複数人の同調した魔術行使は一人で行う魔術の数倍の効果を発揮する。また、複数で演算などを行うため、精度の上昇も期待できるのだ。当然だが欠点もあり、参加者全員の意思統一が必要だったりと制限も多い。

だが、緊急時に使用するでもない限りは、全く問題ない。むしろ安定するために推奨すべきだろう。とはいえ、複数人での魔術行使に初心者の中から慣れ過ぎると、単独で魔術を使えなくなる恐れがあるため注意しなければならないが。

加えて言うなら、今回の転移魔術には試作型の転移補助装置を用いている。サラ一人でも高速飛翔魔術でこのティエの街とトゥローサの街を数時間で往復できるが、わざわざ転移などという多量の対価を必要とする術を使うのはこの試作品の実験のためである。長距離空間転移の実験が実地で出来るというのは割と貴重な機会なのだ。

『空間跳躍』

三人の声が揃い、魔術が発動する。

体から重みが消える強烈な浮遊感がサラを襲う。慣れていないと吐き気を覚えたり、酷い時は意識を失うと言われる転移酔いだ。が、慣れてしまえばどうということはないし、むしろ結構気持ちいい。

実際には一秒と掛からなかったであろう時間のうち、重さの戻った体で前を向けばそこには本拠地である白妙の塔がある。

自分の仕事を果たすため、サラはイーリスと共に塔の中へと入って行った。

第八話

サラはイーリスを抱えて迷宮内を凄まじい速度で飛翔する。

天井がどんな木々よりも高いために出来る芸当だ。迷宮はあまりにも広すぎるため、探索を目的としないのならばこれが一番効率よく進める。

サラの目的はあの巨大トカゲと、それが守っていると思われる石碑のみ。今回はそれ以外の全てを無視すると決めていた。

迷宮への進入と同時に最大範囲の索敵術式で前日に交戦したトカゲに近い反応のあった位置は把握している。既に三頭のトカゲを撃破し、三つの石碑を確認した。残る反応は一つ。入り口から最も遠い地点にあった反応だけだ。

ここまでで確認したトカゲの性質は三つ。縄張りに入らない限りは一切の攻撃を行ってこないこと、縄張りを周回していること、絶対に縄張りからは出ないことである。

つまり、縄張りに近づかなければ全く問題ない存在なのだ。ただ、昨日サラが提出した死骸からとれた爪、牙、鱗、皮、骨は凄まじい強度や魔術抵抗を示していたので、それらの素材からできる武器を狙うものは挑まなければならぬだろうが。

とりあえず、どのあたりまで縄張りなのかは既に把握しているのでそれを元に危険地帯を設定すれば、基本的にはトカゲによる犠牲者をなくすことが出来るだろう。それだけでも充分すぎる収穫と言える。

上空から目視で最後の石碑の位置とトカゲを確認したサラは、トカゲから最も離れた縄張り内の位置に降り立つ。トカゲと交戦して撃破するつもりはあるが、もう大体魔術に対する抵抗やどの属性が効果的かなどは本日最初の接触で確認できたので初撃で打倒するつもりなのだ。

「――全て引き裂く無慈悲なる氷よ、汝が母たる水に交じり、全てを断ちなさい」

精緻にしてあまりにも鋭い攻撃的な術式が瞬時に編まれていく。どんな事態にも即応できるよう、イーリスは抱えたままだ。

どうやら恐怖などとは無縁な様子のイーリスは、サラの胸元を掴みつつ目を輝かせている。好奇心の強いイーリスにとっては危険のない戦闘など、なにか催し物の一種に過ぎないのだろう。

苦笑し、サラは意識を敵へと向ける。木々をなぎ倒して近づいてくるトカゲを睨み、ただ一言囁く。

「豪・圧水刃」

鋭利な氷片の混じった、二本の高速高圧の水の刃がトカゲを四つに切り分かつ。鋼をも切り裂く圧水刃さえ弾く物理的硬度と魔術抵抗を持つ鱗だが、この豪・圧水刃を弾くことは叶わない。何せ、出力次第では地上最強の金属である神化銀でさえも切断できる術だ。頑丈だとはいえ、金剛石よりは柔らかい鱗が耐えられる道理はない。重い音を立てて肉塊と化したトカゲが大地に落下すると同時に、サラはリバース・スペースの入り口を開いて中に入れる。即座にしまふ必要はないが、もしも他の魔物に食われたりすると癪なので倒したらすぐにしまふようにしているのだ。

これでこの階層の石碑の守護者は全て撃破した。後はゆっくりと石碑を読むだけだ。

今までの石碑を思い返しつつ、サラはイーリスを下ろして手をつなぐ。好奇心旺盛なイーリスは手を繋いでおかないと、どこかへ行ってしまいそうで不安なのだ。

記憶力に優れるサラはある程度文章なら正確に暗記できる。重要そうな石碑の文は既に写した紙を見る必要さえない。

——遙か遠き者達へ。

未来を汝らへと託す。

大いなる災厄をここに封ずることしかできぬ我らを呪ってほしい。

——我らの祈りに応えし神は、極小の世界を創り給うた。

この地こそがその世界。

太古に崩壊せし魔界と神界、精霊界の破片を集め、かの災厄をここに封ず。

——封印は百万の昼と千万の夜続く。

地の底深くに封ぜしこの地が表出せしときが、封の緩みしとき。

かの災厄と共に封ぜし幾十もの破滅が災厄への道を閉ざすだらう。

——ゆえに、我らこの地へ多くの武具を共に眠らせた。

災厄と破滅にその武具が破壊されぬよう、我らはこの地の各所へと隠した。

求める者よ、探し、振るえ。彼らもまた、担い手を求めている。

この四つが、今までに見つけた碑文だ。どうせなら一つの大きな碑に全部書いておいて欲しかった。

鬱蒼と茂る森林部を抜け、広い開けた場所に出る。石碑のあいだにあるところは全てが平和そうな場所で、柔らかな草が地面を覆っている。この広大な一階層の中で、石碑の場所だけは木も生えていないし魔物も近寄ってこない。不思議な空間だ。

もしかしたらサラでさえも感知できないほど巧妙に結界でも張られているのかもしれない。またはこの空間のどこかに隠された武具

とやらが眠っている可能性もある。

またいつか神眼の魔術で調査してみる必要があるかもしれない。もしくは地中探査型の最上位魔術でも行使すれば面白いだろうか。

苦笑しつつ、他のと同じくひっそりと建つ石碑の前に立ち、文を読む。

——この第一層、千変の樹海。五つの階層にて構成す。

第一階層の石碑の守護者『恐なる劣竜』。一度倒したとて油断してはならない。

死の後、十の昼と十の夜を経て復活す。ゆめゆめ忘るることなかれ。

碑文を読み、反芻し、意味を理解したサラは、知らず知らずのうちに拳を握っていた。貴重かつ重要な情報だ。石碑に掛かれている内容が真実なら、この迷宮は最低でも五つ以上の階層で構成されているということになる。探索しながらとはいえ、サラが三日ほど掛けても三分の一しか進めなかったような広大な階層が、最低でも五つ以上。世界そのものを迷宮にしているというのは信憑性がありそうだ。

石碑の前で頭を抱えるサラ。

と、そんなサラから離れ、一人草むらで遊んでいたイーリスはあるものを捕まえていた。

「お姉ちゃん、こんなのいたよ」

嬉しそうなイーリスの声に導かれてサラはそちらを見、目を見開いて驚く。

イーリスの指に器用に捕まっている一匹の蝶。それだけなら驚くには値しない。だが、場所が問題だ。この石碑のある広間には植物以外の生命は存在していない。理由は分からないが、今までに見つ

けた四つの広場には文字通り虫一匹いなかった。ここもそれは同じで、サラの用いる索敵魔術には今も自分とイーリス以外の生命反応はないのだ。不死者、つまり動く死体や霊体系の魔物、実体を持たない下位精霊さえ感知できる魔術なのに、この蝶の反応はない。

幻覚、幻影の類かと疑うが、それはない。サラはある理由から一切の幻覚を無効とする。どんな手段を用いたとしても、それこそ神がサラを幻影の罠に落としてたとしても、サラがそれに惑わされることはないのだ。

逆にサラを超える凄まじい技巧でサラの索敵魔術を誤魔化しているのか。それも考えづらい。サラが展開する索敵術式は一つではなく、いくつもの魔術を併用しているのだ。一つならともかく、全てから逃れる方法など存在するのだろうか？

現状、最も可能性が高いのはこの蝶が魔術に反応しない体質を持つているかもしれない、ということだ。無効化ではなく、透過。無効化するなら逆に分かりやすいのだ。もしかしたら、魔術ではなく魔力を透過するのもかもしれないが、その辺りはまたいずれ調べればいい。

なににせよ、面白い。

植物以外の生物が存在しない草むらにいた、魔術を透過する蝶。研究部に渡すにはもったいない存在だ。というか、一個体しか確認できていない生物を解体させるのはもったいない。それに、サラとて一応は女の子だ。たまには蝶と戯れるのも悪くはない。

なににせよ、一つ問題がある。この蝶を連れ帰る方法だ。

魔術を透過するような性質を持つ、蝶のような弱い生物を安全に運ぶ方法をサラは保有していない。魔術が効くなら時間凍結でも掛けて変化を否定し、手で持って来た時と同じように高速飛翔で入り口まで行けばいい。が、効かないので、その方法は使えない。

イーリスの指から離れようとしないので、普通に歩いて帰れば問題ないかもしれないが、いかんせん遠い。今、サラ達がいるのは入り口から見て最も遠い場所と言える場所だ。ちよつと勇気を出せば

第二階層へつなぐところに辿り着けそうなぐらいの位置と云ってもいい。

入り口までは直線距離でおよそ二、三十マイルほどだろうか。実際には曲がりくねった道であることを考えると、一日で踏破出来る距離ではない。

サラは空間転移系魔術とは相性が悪いうえ、蝶が空間転移まで透過する可能性がある以上空間転移も使えない。

仕方ないので時間を掛けて歩くべきか、とサラが思索していた時だった。

不意に蝶がイーリスの指から離れて飛び回りだす。生半可な速度ではない。猛禽が飛翔する速度にも近い速さでイーリスの周囲を飛ぶ蝶を見て、サラは啞然としてしまった。

飛ぶ速さもあるが、そんな速度で飛んでいながら全く風をまき散らしていない。加えて言うなら、羽ばたきと速さが食い違っている。蝶ではありえない速度で旋回していながら、羽ばたきは普通の蝶とそう変わらないのだ。

「……すべてを曝け出しなさい。透破露明」

流石に違和感を覚えたサラは調査のため、神眼ほど高位ではないが単一対象への探查深度なら劣らない術を発動させる。

至近距離でしかも三次元機動なため対象を捉えにくいが、サラはあっさりと蝶を対象としてしまう。魔術の技量もさることながら、投射武器の技量がなければできない芸当だ。

蝶がどのような特性を持っていようと、問答無用で探查をするためサラは意識を集中する。だが、魔術は探查を行う前に完全に弾かれ、無効化されてしまった。

サラが驚きに目を見開く。だが、その弾かれた魔術の痕跡を調べること、どういった方法で魔術を弾いたのかを逆算しにかかった。術を弾いて無効化する方法はそう多くはない。より干渉強度の強い

魔力で弾くか、そういう効果を持つ魔術を用いるか、現代ではそれぐらいだ。遙か太古の魔族や神族、今では魔神と呼ばれる強大な力の持ち主には選択的に魔力そのものを弾く能力の持ち主がいたというが――反応としてはどうもそれが一番近い気がする。

むう、と唸り、サラは仕方ないのでかなり高度な力任せの方法を取ることにした。

袋の中に周囲の空気ごと蝶を入れ、その上で袋とその中身に慣性相殺の魔術を掛ける。蝶には効かないが、蝶の周囲の空間には魔術が効くので、面倒なうえ魔力を大量に消費するが蝶の存在する空間という大きな対象を区切って魔術を掛けたのだ。

「では、イーリスちゃん、帰りましょうか」
「うんっ」

遊んでいた蝶があっさりと捕まえられたというのに、なんら気にしていない様子でイーリスが笑う。サラに全幅の信頼を寄せているのか、はたまた別の何かか。単に無邪気なだけかもしれないが。

イーリスを抱え、サラは指を弾いて魔術を発現させる。飛行魔術。魔力を注げば注ぐだけ速度の上がる魔術のため、強大な魔力を持つ者が用いれば凄まじい速度を叩き出すことが可能となる。ただし、肉体に掛かる負荷は速度が上がれば上がるほど大きくなるうえ風圧などの影響が凄まじいので、サラのように全属性の魔術をこなせなければ高速での運用は難しい。

およそ十分。それは最高速度で飛翔するサラがこの場所から迷宮の入り口まで飛ぶのにかかる時間だ。強力な障壁術との併用のため消費する魔力量が甚大になるが、イーリスを抱えて飛ぶ以上障壁は欠かせないので仕方ない。

空を飛ぶ間ずっとはしゃぎ続けるイーリスを微笑ましげに見つつ、サラは今後のことに思考を巡らせるのだった。

第九話

パタパタと蝶が飛ぶ。

迷宮内に生息していた蝶だが、地上の花の蜜も口に合ったらしい。イーリスと戯れつつ、花に止まって蜜を吸う姿は普通の蝶にしか見えない。

そんな蝶を見つつ、サラは嘆息する。どうしたものか、と。

正直なところ、この蝶をどうするか判断は上層部でも割れている。イーリスと同じく、まだたったの一個体しか発見されていない蝶のため、懐いているイーリスとその保護者のサラに預けるという意見。そして、所詮は蝶のため、研究のためにばらしてしまえという意見だ。

今はブリジットの根回しで前者の意見が大勢のため、蝶はサラに預けられている。だが、問題はサラが迷宮に潜っているときだ。

まだ迷宮に潜る時間は短く、行うのも本格的な探索のための前準備のような段階だが、それでも数時間は潜り続ける。そのときに蝶をどうするのが問題なのだ。

今は大きめの籠に入れて、司令部に詰めている女性が世話をしてくれているが、いつまでもそれに甘えるわけにはいかない。

とりあえず攻略のめどが立ってきたので、ブリジットや長老と相談していることを実行に移すべき時が来たのかもしれない。

魔術師協会がもうすぐやろうとしていることに、その実行はかなりの好影響を与える。あとはいつ実行に移すかだ。

サラが蝶を連れ帰ってから一週間たった今、腕の立つ協会員に迷宮内の素材で作った武器を配布して、その性能の試験を行っている段階にある。迷宮内で採れる薬草や果実は魔術薬にされて、臨床試験を行っている。とりあえず重大な副作用は見られず効果も劇的なため、遠からず配布されて、この街に実地での研究を臨む錬金術師や魔術調薬師が派遣されるだろう。

そうなつてくると大きくなつてくるのは魔術師協会以外で迷宮へ挑もうとしていた者達からの反感だ。まだ攻略が始まって一週間強のため、反感はさして大きくなっていないが、その内爆発するのは目に見えている。その対策も、魔術師協会の行おうとする策には含まれていた。

あとは協会員以外でも生存できるだけの準備を整えるだけ、それほどどの段階にまで達しているのだ。

まあ、今のサラにとってはそんな大きな問題よりも、身近な問題の方が重大だった。

「あの蝶にも、名前を付けないと駄目なんでしょうか……」

サラは嘆息しつつ、イーリスと戯れる蝶を見やる。

名前のない存在にとつて、名前を得ることは力を得ると同時にそれ以前を失うことと同義だ。名はかたち、かたちは力。縛りのなかった存在が、その名前によって縛られることとなる。そう、イーリスと同じように。

悪用されかねない事実のため、サラはこのことを協会長たるブリジットや信頼のおける『雷帝』ぐらいにしか話していない。そのため、イーリスと蝶については全責任をサラが負っている。仕方がないのだ。

一応、他の迷宮内で発見されたものは神話や地名に基づいた種名が付けられている。しかも、現在だと魔術師協会の円卓会議で合議の上で名付けが行われるため、余計な心配がいらないのだ。

嘆息する。イーリスや世話をする職員に名前を付けてほしい、と再三急かされているのも、サラの憂鬱に拍車をかける。

とりあえず、サラはイーリスと戯れている蝶を見やる。

今日は久しぶりの休みのため、昼間からこうして草原で遊べているのだ。無暗に速い蝶とそれを平気な顔で追いかけるイーリス。なんだか、最近イーリスの行動速度が上がってきている気がする。ち

よつと前までは子供らしい動き方だったのに、今では狩人のような鋭い動きになっている。

複雑な思いを抱えつつ、サラはそろそろ本格的に動き方の指導をした方がいいかと考えていた。

今のように自由に遊ばせているのは、イーリスを戦力にしようとは思っていなかったからだ。しかし、やたらと身体能力の伸びが良いいーリスを見ると、遊ばせておくのがもったいなくなってくる。何せ、十歳児程度の体でしかないのに、大型猛禽並の速度で飛翔する蝶と追いかけてこが出来るのだ。今から指導していけば、数年としないうちに素晴らしい戦力になるだろう。

が、サラとしては率先して戦力に育て上げるつもりはない。サラ自身の戦闘能力が飛びぬけているため、周囲に更なる戦力を置けば必要以上に耳目を集めることになるからだ。しかし、サラも迷宮に潜る都合上、最も身近にいるイーリスが戦闘能力を持たないというのも不安ではある。何かよからぬことを考えた者が、イーリスを狙わないとも限らないからだ。

しばらく悩んでいたサラだったが、やがて覚悟を決めたようにイーリス達に近づいていく。

イーリスも蝶も、迷宮を故郷とする。ならば、自ずから迷宮へと潜るようになるだろう。そのときに必要な力がなければ、迷宮への挑戦さえできない。そんなことがあってはならない。

だから、サラはイーリスを戦える者へと育て上げることを決めた。

「イーリスちゃん」

ただし、選択はさせるべきだ。重要な分岐は、自分で選び取らなければならぬ。与えられるままに、享受するものではない。唐突に駆けられた声にも、イーリスは笑顔を浮かべる。しかし、サラの声に含まれた真剣さに、キョトンとした表情になってしまう。

「強く、なりたいですか？」

イーリスにとっては不意の質問だ。答えられなくても仕方がない、そう思いつつ、サラは言う。

僅かな時間、サラを見上げていたイーリスだったが、すぐに精一杯真剣な顔になってサラを見上げた。幼いためか、真剣な顔と言っても可愛らしいものだが。

「うん。強くなりたい」

「どうしてですか？」

「お姉ちゃんに並びたいの。それで、わたしも誰かを助けられたらいいなって、そう思う」

「そうですか。分かりました。では、もう一つ」

言って、サラは蝶をキツと睨む。

一週間、まがりなりにも観察してきたのだ。いくつか気付いたことはあるし、その中でもこれだけは確認しなければならない、ということがある。

「蝶の貴方、わたくし達の言葉が通じていますね？」

強く、強く意志を込めてサラは蝶へと話しかける。

一切の韜晦を許さぬ強い視線。サラほどの術者がこうして睨むのならば、邪眼として機能しかなないほどの。

しばらくその場で飛び続けていた蝶だったが、やがて諦めたようにサラの手にとまった。

『何の用かなあ。でも、よく分かったねえ。あたしが言葉を理解してるってえ』

甘い、間延びした声がサラの脳内へと響く。

念話だ。今では特化した専門の魔術師以外では習得が難しいされる高等魔術。サラの周囲には教えてくれる人がいなかったので使えないが、高位の魔術師であれば使えるようにはなるらしい。ただ、かなり習熟していないと不要な情報まで相手に伝えることとなるため、使用には注意が必要な魔術とされる。

それを、こつも無造作に使えるのか、この蝶は。

「貴方に、名前はありますか？ 貴方の種族、または貴方というこの名前が」

『んふ、この時代にもいるかなあ。かつてあつた終わりを生き抜いたもの。つまり、この時代で言うところの古代種、中でも上位種と呼ばれる魔物の仲間あ。あたしは魔界の魔物の一種で、フェルミエールっていう種だよ。

でも、あたし自身の名前はないかなあ。あつたかもしれないけど、もう忘れちゃった。けど、なあに？ もしかして、名前を付けてくれる気だったの？」

「ええ。せつかく一緒にいるのです。名前がないと、不便でしょうから」

『んふー。優しいねえ、お嬢ちゃんは』

「優しくなんて、ありませんよ。やってもらいたいことがあるだけですから」

そう、サラはこの蝶に頼みごとをしたただけ。だから、優しいのではない。利用するだけだ。

軽く胸を刺す罪悪感を覚えるが、サラはその感情を黙殺する。しかし。

『そついうところが、優しいんだよ』

蝶の甘ったるい声に、苦笑するようなニュアンスが混じる。サラは胸の痛みを表情には出していないのだが、よく分かるものだ。もしかしたら、目で見ているのではないのかもしれない。

ちよつと不意を突かれたので、サラは軽く目を背ける。が、すぐに思い直して蝶を見つめた。

「では、よろしいですか？」

「うん、いいよ。ああ、それと、一応言っとくけど、あたしは別に名前を付けられたからって劇的な変化はないよ。一応、これでも古くから存在していて、種の名を地に刻んだ存在だからね」

「そうなんですか。少し安心しました」

ほつと息をつくサラ。大きな変化がないのなら、そう緊張するほどの事でもない。

あとはこの一週間、悩んで思いついた名前を口に出すだけだ。

「では、貴方の名前はオリオールです」

「オリオール。うん、じゃあ、あたしは今からオリオールだね。えへへ、名前かあ。いいなあ、どれくらい振りだろ」

浸るように、蝶——オリオールは軽く羽ばたく。

一体どれほどの年月をその身に刻んできたのか。小さな蝶の姿からは読み取れない。ただ、言葉に秘められた重みは感じられた。

『それで、あたしにしてほしいことってなあに？』

「——あ、はい。この子、イーリスちゃんのお目付け役というか、そういうものをしていただきたく思っています。イーリスちゃんをこれから本格的に鍛えますが、しかし同時にわたくしは迷宮の奥へと潜らなければなりません。他の人がまだたどり着けない、奥へと恐らく、数日以上に渡る期間、迷宮へ潜り続けることになるでしょ

う。その間、イーリスちゃんが無事に過ごせるよう、見ていた
だきたいのです」

『ああ、そっかあ。この子、珍しいし、誰かに手を出されちゃ困っ
ちゃうもんね。いいよ、これでも古より存在を保ち続ける魔の血脈
の裔だし、今では伝わらない魔導の数々で守ってあげちゃう』

えへへー、と甘ったるい声で言葉を伝え、オリオールはサラの指
から飛び立つ。そして、話は終わりとばかりに再びイーリスの周り
を飛び始めた。イーリスも応じて追いかけて、ここが再開する。

それを見て、サラは正しい走り方を教えるために立ち上がった。
オリオールもかなりの速度で飛べるようだし、遊びの中で敏捷性を
養えるのなら、ありがたいことだ。あとでオリオールと相談して、
追いかけて、ここを訓練に変えてしまおう。

苦笑と共にサラはイーリスに走り方を指導する。

穏やかな時間が、過ぎていった。

第十話

時が来た。

ブリジット・フォンテーヌは不敵に笑う。

魔術師協会が本格的に迷宮攻略に乗り出して二週間。探索部隊は経験を積み、第一階層ならほぼ負傷することなく行動できるようになった。一部は第二階層の素材の採取さえ可能としている。サラに至っては第三階層で巨大な亀を仕留めて持ち帰っていた。

ティエの街でくすぶっていた外部の者達にも情報を渡し、魔術師协会会员以外でも迷宮攻略が可能なことを実証した。今では彼らも魔術師協会には不満を口にするものの、否定的ではない。

また、周辺各国へは貢物として迷宮で採れた素材から作った魔術薬や、武具を送った。傷薬のほかには回春の薬など、事前に集めていた情報に従い、各国の王侯貴族が求めてやまないものを選択して。当然ながら各国からの反応は素晴らしいもので、多くの目を迷宮に集めることに成功した。

そして、もう一手。魔術師協会から完全に独立した、迷宮探索の互助を行う組織の設立を行う。

名を、冒険者協会。今はまだ迷宮に詳しい人材は魔術師協会にしかないため、出向と言う形で魔術師協会の者が高い地位についているが、一定の数以外は魔術師協会以外の人材と入れ替えていく予定だ。既にこの方針は各国に周知している。

ついでとばかりに、ティエの街に派遣した錬金術師や魔術調薬師に迷宮産の道具を大量に作らせて流通させ始めた。今でこそ魔術師協会の占有する技術と知識でのみ作ることが可能な道具や薬だが、いずれ技術は解析されて他でも作られるようになるだろう。むしろ、そちらが狙いだ。

蓄積した技術や知識を物の形で放出することで一般に拡散し、自分達だけで独占するのではないということを主張しているのだ。た

だし、本当の意味で重要な情報を渡すことはしない。たとえば空間転移に用いる鉱石などは採掘できる場所自体を極小かつ執拗なまでの隠蔽魔術で隠してしまっている。

これらは全て一つの目的の元で行われていることだ。どこの誰よりも魔術師協会が先を行きつつ、しかしそれがもたらす利益を独占せずに、広くに分配する。——つまり、魔術師協会が迷宮攻略の基礎を作ったと誰にも印象付けているのだ。

魔術師協会が求めるものは金や物ではない。『必要とされることだ。決して驕らず、縁の下の力持ちになればそれでいい。近くにあって当然の存在として溶け込み、魔術師自体の数を増やして民間の誤解を解き、魔術師が受ける差別をなくしていく。それが魔術師協会創設の理念であり、代々の協会長が受け継いできた意志だ。

今回の迷宮出現と、迷宮内部に存在した多くの物はその理念の実現を大きく前進させるものだった。苦難の存在は間違いないが、全体としては望むべき苦難だ。苦難は大きければ大きいほど、それを乗り越えた時に得られるものも大きいからだ。

「サラには、まだまだ苦勞を掛けるわね」

ぼつりと、ブリジットは本音を漏らす。

誰もいない、白妙の塔の執務室内でのことだ。ここには初代魔術師協会長が複雑極まる魔術を掛けているため、盗聴などは絶対に出来ないようになっていて。また、ここに侵入することも不可能だ。当代の協会長とそれが認めた者のみが入ることが出来るようになっていたからだ。だから、ここでならば弱音も吐ける。協会長という地位である以上、誰にも見せられない姿をここでならとることが出来るのだ。

軽く頭を抱え、ブリジットは迷宮攻略の進捗状況を確認する。

確かにサラは第三階層まで到達している。だが、逆に言えばまだそれ以降には到達できていないのだ。魔術師協会が自由に動かせる

戦力の中で最大の力を持つのがサラで、彼女をしても第三階層まで到達するのに二週間を要している。

迷宮を攻略するうえで、現状一番の問題は各階層に存在する守護者と呼ばれる強力極まる魔物だろう。第一階層の『恐なる劣竜』、第二階層の『喰らう大樹』、第三階層の『動く山』。どれもサラ以外だと攻略の難しい魔物だ。中でも『動く山』は桁外れの脅威だ。千フィートを超える体高、甲羅の直径もそれと同じほど。高火力の魔術を操るサラでさえ、十時間もの激戦の末に打ち倒した化け物だ。正直なところ、真っ向から撃破するのはサラ以外では不可能だろう。幸運なのは、これらの守護者は一度殺せば一定期間はいいままであることか。『恐なる劣竜』、『喰らう大樹』が十日間、『動く山』は半月ほど復活に時間が掛かるという。回収した死体が動き出すということはないようなので、また迷宮に湧いて出るのだろう。

とりあえず強敵である『動く山』がしばらく存在しないのはいいことだ。あとは、『動く山』との激戦で消耗し尽くしたサラが回復するのを待てば、第三階層の探索は再開できる。

サラに頼り切りになっていることを自覚しつつ、ブリジットは有効な手を打てない。

そもそも、迷宮攻略を行っている非戦闘員を含めた人員五百名は魔術師協会の協会の半分を占める。さらに、周辺各国や王国貴族への交渉役として送り出した人材が百五十名。協会本部に残る三百五十名は見習いや事務特化型だったり、本部の防衛用戦力だったり、と動かしようのない人員ばかりなのだ。これ以上、迷宮への応援を送ることは出来ない。

嘆息し、ブリジットはたまっている仕事と向き合った。今やることは嘆くことではない。笑うことでもない。サラ達、迷宮攻略組が少しでも楽を出来るよう後方から支援を行うことだ。そのためなら、山のような書類を片付けることも、人と会って愛想笑いをするのも、少しでもむしろうとして来る連中とにらみ合うことでも何でもやる。

一度自分の顔をピシヤリと叩き、気合を入れ直したブリジットは猛然と自分の仕事を片付け始めた。

サラは自宅のベッドで熱に浮かされたように唸っている。

強大な魔力の行使を要する戦闘を十時間もの長きに渡って続けたため、その反動が来ているのだ。

肉体的にもかなり鍛えられているサラだが、まだ十五歳の少女。体は成長途上で未熟なため、無茶をし過ぎれば倒れるのは道理だろう。

だが、サラは回復力もずば抜けている。第三階層に出現した魔物や第三階層の所感などを書いた報告書を仕上げて提出し、ぶっ倒れてから半日と過ぎていないのに、もう回復の兆しが見えていた。ほぼ枯渇していた魔力は全快し、後は長時間に及ぶ戦闘で加熱しすぎた全身が冷えるのを待つだけだ。

と、そんな状態のサラの枕元にオリオールが飛んできた。

『……サラちゃん、第三階層へ進んだって、本当？』

サラの寝ているベッドの縁にとまり、オリオールはあの甘い声ではなく、真剣な声音でサラへと語る。

回復してきて目の覚めたサラは、その言葉にしっかりと頷いた。まだ声を出すのは億劫なので、仕草だけの返事だ。

『そう、そうなんだ。じゃあ、気を付けて。そこから下には出会ったら危険なのが潜んでるの』

悲痛な声。本当にサラの身を案じていなければ出てこない感情に

満ちている。

どういう意味なのかを問うため、サラは口を開く。が、頭が鉛のように重く、上手く声が出ない。

『無理しないで。あたしの言うことを、覚えておいてくれるだけでいいよ。多分、碑文を集めてみたいだから知ってると思うけど、あの迷宮には災厄……ものすごく強い何かが封印されてる。あたしはその正体を知らないけど、昔聞いた話では相当とんでもない化物だったらしいの。自分の配下を引き連れて異界から攻めて来たって噂もあつたぐらいに。』

で、なんとかそれを封印したときに迷宮が出来ただけど、あの迷宮自体を封印するとき一緒に紛れ込んだ古い魔族や神族がいたの。永の眠りにつくために紛れ込んだあたしみたいなのと違って、中には封印が解けた後、あの時にいた英雄達のいない時代で好き勝手に暴れたいつて連中も少なくなかった。それでね、もし動いてなかったら、なんだけど、第三階層をそういう暴れん坊の内の一体が根城にしてたと思う。だから、次に行くときは気を付けてね』

気遣わしげに言い、どこかへとオリオールが飛び去っていく。全てを聞いたサラは、ゆっくりと目を開けて手を握りしめた。力の入らない手を、ぎゅっと。

オリオールはきつと、サラを生かすために助言したのだろう。サラに生きていてほしいから過去のことを思い出し、話してくれたのだろう。

だが、サラにとってオリオールの話は逆効果だった。

サラはみんなが好きだ。笑顔を見るのが好きだと言ってもいい。楽しそうな活気を感じるのは無上の喜びの一つである。

逆に言うならば、それらを理不尽に破壊するものを嫌う。

たとえ、それがどれほどの相手であつたとしても、サラにとって

は敵だ。魔術師協会の一員としての敵ではなく、サラ・セイファール個人の敵である。

まだ見ぬ敵を思い浮かべつつ、サラは早く体力を回復させるために目を閉じた。まずは今の体調を回復させなければいけない。

オリオール心配をよそに、サラは敵との戦闘を覚悟する。たとえ死すとも、最低でも一体は道連れにしてみせると、決意しながら。

サラの家、それは魔術師協会の本部が存在するトゥローサの街の郊外にあったはずである。しかし、今はティエの街の郊外に移っていた。それも家の周囲の土地ごとだ。

これが代々師弟に受け継がれる理由。家が内包する特殊な魔術の内の、最大の物だ。すなわち、領域空間転移。

大地に走る魔力やその他の力、それらを十年単位で集めることで超長距離での領域空間転移を可能とする。土地の基礎そのものに術式を刻み込んだ自然石を埋め込むことで、大規模な儀式の代わりにしているのだ。

通常の魔術と違い、一度発動したらまた数十年は起動できないが、術者が未熟でも発動権限さえあれば容易く使えるという点が特徴だ。『動く山』の撃破前に転移してきていたため、サラは運よく自分のベッドで休めているのだ。

そのサラの家の修練室で、イーリスは一人真剣な顔で魔術の訓練をしていた。以前にサラに教わったもので、本当に初歩の初歩段階の訓練法である。

魔術を使うにあたって、まず第一に要求されるのは自分の中に存在する魔力を認識することだ。当然ながら、最初から魔力を認識できている者などほとんどいない。よほど才能に溢れた神族や魔族に

少数いるぐらいだろう。そのため、魔力を認識できる状態にする必要がある。

その状態にする方法は大きく分けて三つ。深い瞑想と修練により、自分という存在を確認し、理解し、その中で魔力の存在を認識する方法。空間中に高濃度の魔力が存在する場所に滞在し、第六感で魔力を認識する方法。そして、他の熟練した魔術師にゆっくりと魔力を注いでもらい、半ば無理やり覚醒させる方法。

今現在、多く取られているのは二つ目と三つ目の方法である。一つ目の方法は単純に時間が掛かるため、敬遠されていると言ってもいい。

ちなみに、イーリスが行っているのは一つ目の方法と二つ目の方法を合わせたものだ。普通よりも高い濃度の魔力が満たされた空間内で、深い瞑想を行うことで自分と周囲の魔力を認識するのである。ただし、この方法も才能がなければかなりの時間を要する。しかも、魔力をよりよく認識するために魔力の薄い空間でも瞑想を行わなければならないなど、面倒でもある。

とはいえ、安全性を考え、より高い次元を目指すならばこちらの方法を取る方がいいのだ。魔力に覚醒するまでの時間はかかるが、時間を掛けて魔力を体に馴染ませるため魔力への親和性が高く、繊細な魔力制御を可能と出来るからである。

ただ、最近あまり繊細で緻密な術式構成を重視することはあまりない。それよりも発動の速度を求められる場面の方が多いからだ。繊細で緻密、というと聞こえはいいが、逆に言えば時間が掛かるということなのだから。

わざわざ時代に逆走することをイーリスに求めるサラ。何か思惑があるのは間違いないが、それはまだ語られていない。

イーリスも説明を受けたうえでこの訓練を指導されているが、サラに何かを問いただしたことはない。だからと言ってイーリスが盲目的にサラを信じているわけではない。信じていないのでもない。

単純に、信頼しているのだ。サラは必要なことはイーリスに伝え

てきた。サラが伝えないのは現時点では伝える必要がないからだ、
イーリスは判断しているからである。

しかし、信賴しているとはいえ、限界はある。

深く、深く集中して自己に埋没しなければいけないのに、イーリスは訓練に集中できずに歯を食いしばった。

「分かんないよ、お姉ちゃん。集中できないよ……」

仰向けに倒れ、イーリスは暗い天井を見上げる。

暗い中の方が深く集中できるため、明かりは点けていない。そのせいで、イーリスは鮮明にあの時の光景を思い出せてしまっていた。いつも余裕を持っているサラ。どんなときでも、サラ自身が傷を負ったり、危険な状態になることはなかったのに。

今日、五日ぶりに迷宮から帰還したサラは憔悴しきり、着ていた服もボロボロになっていたのだ。

聞けば、山のような亀と激戦を繰り広げてきたのだという。大きさだけでも他を圧倒するのに、亀は強力な魔術を同時に多数展開して攻撃と防御を行うというありえないような戦闘能力を有していたのだ。

そんな化け物を真つ向から撃破したサラはきつと、とても凄いのだろう。でも、けれど、イーリスは初めて不安を覚えたのだ。

強くてきれいなサラが、死んでしまうかもしれないという、いなくなってしまうかもしれないという不安。

嫌だった。そんなこと、絶対に嫌だった。

だから。

イーリスは、今この瞬間に本当の意味で決意したのだ。

強くなることを。ただ一人で突き進むサラの隣に立つことを。

今はまだ、イーリスは弱い。きつと、迷宮内の魔物どころか、地上の魔物の中で一番弱いやつにも負けてしまうだろう。

けれど、きつと強くなって見せる。

絶対に。そう、心に決めて。

イーリスは再び訓練に移った。

かつてないほどの集中力で、今まで感じたこともなかったほどの
激情を風の底へと沈めて。

第十一話

倒れてから三日休んだサラは、いつもの探索用装備に加え、普段は付けていない腕輪を身に付けて迷宮の前にいた。

寝ながら三日間掛けて、サラは『動く山』攻略に十時間も掛けてしまった理由に答えを出していた。考えてみれば簡単な話だ。単に、この迷宮をなめすぎていただけの話である。

加減が効くよう、普段は素手で戦っていたため、武器を持ち歩くという発想のなかったサラは迷宮攻略時もほとんど身一つの状態で挑んでいた。武器の扱いは師に叩き込まれていたというのに、持ち歩かずに大打撃を受けるといふのは醜態と言える。

だから、サラはもう油断することなく武器を携えている。身に着けた腕輪はサラが全力で戦う時のみに使用するいくつかの武器を収納している神器なのだ。

いつもならさっさと迷宮へと入っていくサラだが、今日は様子が違う。サラの方に問題があるのではなく、イーリスがサラの裾を掴んで離さないのだ。

「大丈夫ですから、ね？　大丈夫、わたくしはそう簡単に死んだりしません」

「でも、だって、だって……」

「んー、分かりました。では、こうしましょうか」

泣きじゃくるイーリスをあやしながら、サラは手近なところにあった花を摘み取り、それにある魔術を掛ける。

わずかに明滅する花をイーリスに手渡し、優しく笑いかけた。

「これにわたくしの命を分け与えました。わたくしが生きている限りは、この花が枯れることはありません。萎れたりしたら、弱って

いる証拠ということになります。

だから、これを持ってわたくしの帰りを待っていてください。大丈夫、わたくしは絶対に死にませんから」

それはいつもの笑みだ。余裕をにじませた、強者の笑み。
あの弱り切った顔ではない。いつもより、むしろ大きな余裕を持っているかのような――。

「お姉ちゃん」

だから、イーリスも決める。笑顔で送り出すことを。
この危険な迷宮に入るサラに、不安を抱かせないように。

「いつてらっしゃい」

「ええ、行ってきます。早ければ、明日の晚には帰ってきます。それまで、オリオールと一緒に頑張ってくださいね？」
「うん」

いい子、とサラはイーリスの頭を撫で、ゆっくりと歩き出す。
その歩みには、一切の油断も隙も存在しなかった。

千変の樹海その第一階層は緑で覆われた森林だ。

だが、よくよく考えると、なぜ千変などという大層な名がついているのか。

その理由は、第二階層以降に進出したものしかわからない。

第一階層を飛行魔術で駆け抜けたサラは、第二階層への階段へと

足を踏み入れる。

上りではなく、下りの階段だ。数百段に及ぶ階段を抜ければ、まず誰もがそのむせ返るほどの甘い花の香りに驚くだろう。

そう、第二階層に存在する植物は全てが花を結ぶものであり、常に満開の状態で咲き誇っているのだ。

更に言うならばその攻略難度は第一階層の比ではない。魔物を無視したとしても、その舞い散る花びらが常に視界を遮り、異常を知らせる匂いは花の香りですべて掻き消えてしまう。また、無作為に漂う花粉は判断力を著しく鈍らせ、帰り道を忘れさせる。つまり、この第二階層は幻惑の迷宮なのだ。

加えて、潜む魔物も第一階層よりも厄介だ。何が厄介かと言うと、本体の強さ自体は第一階層よりも下だが、常に花木に擬態しているため目視での確認は困難を極め、魔術などを使わず毒の粉などで攻撃してくるため知らぬ間に全滅の危機に陥らされてしまう。

安全に進むには移動型の防御障壁を常に展開し続けるか、サラのように自前の各種抵抗力で毒などを無効化するほかない。

とはいえ、広域の索敵魔術を常時展開できるサラにとっては第一階層よりも楽に進める場所だ。敵の肉体は弱いので、遠距離からの先制攻撃を加えればそれで終わる。毒などを持っていたとしても、触らずにリバース・スペースへと落とし込むため関係ない。

第二階層で最大の問題は『喰らう大樹』という名の付いた巨大な食獣植物だ。第二階層に存在する石碑の守護者で、自分を中心とした直径約三百ヤードに侵入した動物へと触手を伸ばして攻撃する。触手の速度、威力は図抜けていて、下手に近寄れば障壁ごと砕かれ、捕食されてしまうだろう。

だが、現在『喰らう大樹』は存在しない。一週間前にサラが全て撃破したため、あと三日は出現しないのだ。

そう、だから。今の最大の問題は。

「クハ、クハハハハハハッ！ みいいいつうけたあああつ

！

声が聞こえると同時に、サラは腕輪から一本の巨大な戦鎚を取り出して握りしめた。

索敵魔術に反応はない。だが、オリオールとの協力を得て、サラはこういった手合いに対する感知魔術を構築していた。

魔力を無効化するなら、魔力以外で感知すればいいのだ。

意識を拡張し、サラは魔力以外で自分の体に眠る力を引き出す。

それは生物が本来持つ力。生命力そのもの。氣と呼ばれていた力だ。氣は魔力と相性が悪いため、サラはあまり上手く操作することは出来ないが、微量の氣を周囲に展開して敵の存在を感知することくらいは出来る。

そして、いくら魔力を透過すると言っても、その存在を認識してしまえばサラならいくらでも位置を知る手段を持っているのだ。

敵は真後ろからサラを斬り付ける。だが、それを戦鎚で弾き飛ばし、サラはそれを見た。

全体的な印象はタキシードを着た痩身の青年。ただし、顔のデッサンが崩れていなければ。本来白目の部分が血のように朱く、瞳は夜のように黒い。そんな目が満月のように丸く見開かているのは冗談にしか思えない。鼻も高い、というか驚鼻を越えて五インチぐらいの高さだ。口も頬までバツクリと裂けている。

怖気を誘う外見。そして、内包する魔力の禍々しさ。

分かる。これは敵だ。生きとし生けるものの全ての敵だ。

「イイツヒヒヒヒヒ、お前だな、お前だな、お前だなアアアア！？」かの巨獣を、山の如きものを、『動く山』を滅ぼしたものは！ あひや、ヒヤヒヤヒヤハハハハハハッ！！！！

殺すよ、殺そう、殺して犯すぜ、アギヒヒヒヒイイ！」

「そうですか、わたくしも貴方を殺しに来ました」

何が楽しいのか笑い続ける敵と、あくまでも冷徹に告げるサラ。そして、問答はそれで終わり。両者はほぼ同時に動きだし、同時に必殺の一撃を繰り出した。

戦鎚と剣が打ち合わされ、大気が震え、周囲の木々の花が散る。その凄まじい衝撃は、しかしサラとその敵を傷つけるには足りない。このたった一合の打ち合いで、サラは相手の実力を正確に読み切った。速度は互角、だが臂力は相手の方が圧倒的に上ということ。しかも、恐らく長き時を生きてきているはずの相手だ。技量でも負けているだろう。

だから、サラは笑う。

己が全力を振るうことに躊躇いを覚えない存在に、久方ぶりに出会えたことに。

およそ淑女らしくない、獰猛な笑みを浮かべたサラは戦鎚の持ち方を変える。それは習い覚えてきた構えではない。悠然と戦鎚を肩に担いだ、相手を見下ろす構え。

戦鎚の柄の長さはサラの身長をゆうに超え、鎚の部分はサラの胴体部分ほどもある。そんな巨大な代物を軽く担ぐ。

サラの構えを見た敵は笑みを潜めてジリ、と僅かに後ろに下がった。

気圧されたのだ。サラに、ではない。サラの持つ戦鎚にだ。

嘆息し、敵は持っていた剣を己の心の臓へと突き立てる。一瞬だけサラは動揺しかけるが、すぐに跳ねた鼓動を抑えた。

理由は簡単だ。敵は自殺したわけではない。己の半身である剣を身に取り込むことにより、本来の姿を取り戻しているのだ。

今攻撃すれば勝てる、そう思いながらもサラは動けない。攻撃すべきと言う理性を、本能が押しとどめている。

動けば、死ぬ、と。

高密度の魔力に覆われ、姿を変えていく敵。その姿はまさに悪魔。古の魔族の内でも、特に忌むべき存在。

変化が終わったその姿は、殺戮のみに特化したかのようにも見え

る。

「……その戦鎚はかの『破壊神』様の武器の似姿。狂気に身を浸しているとはいえ、我は、俺は、私は破壊するもの。殺すもの。戦鎚に敬意を表し、我が真なる姿と名を教えよう。」

我は、俺は、私は中級魔族グ・ランデル・オルゴーン。グレンデルの悪魔と呼ぶがいい。この我が姿をさらすのだ。貴様もその全霊で以って戦うがいい」

右手そのものを巨大な剣とし、左手が巨大な盾のようになっているが、それ以外は人間の形を保っているのが恐ろしい。

しかも、その肉体は先ほどの瘦身からは考えられないほどの筋肉で覆われており、速さも力も格段に上がっていることを想像させる。それを見て、感じて、サラはほつと息を吐く。

よかった、と。本当によかった、と。

きつと、このグレンデルの悪魔とやらはサラが『動く山』を殺したところを見て動き出したのだろう。少しの間、第三階層でサラを探し、今まで第二階層を探していて、次は第一階層へと向かうところだったのだろう。

第二、第三階層に到達できている冒険者は、サラを含めてさえ僅か三組。合計十二人。しかも、数日前からはサラ以外第二階層へと潜っていない。つまり、誰ひとりとして被害が出ていないということだ。

これはかなりの僥倖といえるだろう。

サラが今相對している存在は、自分で言っていた通り何かを殺すために生きている。その実力は先ほどの瘦身の状態でさえ平常時のサラと互角以上。おそらく、上の階層にいる者達では認識することさえ出来ずに瞬殺される。

だが、今なら。

この瞬間ならば、この化け物はサラ以外に目を向けてはいない。

今、この時に殺してしまえば、それで他の被害を出さずに済むのだ。

キツ、とサラは敵を睨み据える。グレンデルの悪魔、その呼び名にふさわしい威容と能力を持つ化け物を、真っ直ぐに。

中級魔族と、こいつは言った。常識的に考えるのならば、上級だのそういうもつと上の存在がいるのだろう。なら、こいつ程度に手間取ってはい話にならない。

「ギャヒャアッ！」

奇声を上げ、凄まじい速度でグレンデルの悪魔はサラへと襲い掛かる。

速い。目では追えない。強大な魔力を背景に人外の域にまで強化しているサラでさえ、その動きは捉えきれない。

だが、分かる。今のサラは目で見るよりも魔術によって拡張した空間識で物を認識しているのだ。強化の度合いを引き上げつつ、サラは戦鎚を斜めに構えることで大上段からの一撃を受け流す。

甲高い耳障りな音が響く。金属がこすれる音は不快だが、そんなものを気にするほどサラの精神はやわではない。

攻撃を受け流されて体勢を崩したグレンデルの悪魔に、反撃として体のバネのみで戦鎚を鋭く叩きつける。長い戦鎚を器用に振るい、至近距離の相手に恐ろしく重い一撃を叩き込んだ。

本来の威力は出ないが、しかしその一撃の重さは桁外れといえる。巨岩をも叩き砕く威力で振るわれた戦鎚は、グレンデルの悪魔の強靱な盾をたやすく陥没させて吹き飛ばした。

そして、サラは吹き飛んでいく敵に容赦をするほど甘くはない。瞬間的に鋭い術式を編み上げ、強力な魔術を発動させる。

「雷鳴よ、引き裂け。雷閃刃」

雷光の速さで放たれる紫電の一閃。切れ味は圧水刃に劣るものの、速度では比べるべくもない。放たれば回避不可能。それが常識だ。だが、敵対するは遙か太古に眠りにつきし古の魔族。地面と水平に吹き飛んでいるため、並の存在ならば回避どころか防御さえできない困難だろう。

しかし、それを覆すからこそ、悪魔と名乗ることが出来るのだ。

強烈な魔力の集中を悟ったグレンデルの悪魔は、慣性相殺の術を発動させる。人と交わり本来の力を失った魔族とは違い、存在そのものが魔である彼にとって、魔術とは手足の一部に等しい。一切の詠唱も起動呪もなく、高速の魔術発動を終えた。

加えて、サラの魔術発動の瞬間とその時期を完全に読み切り、その時にどの地点に自分がいるかを誤差を含めて解析し、その場所の空気を固めて足場を作る。そして、サラの魔術発動よりほんの僅か一瞬前に自分の体を右へと弾き飛ばした。

右方向、つまり木々が多くある森林部だ。いかにサラの雷閃刃が鋭い切れ味を誇ろうとも、本来の威力を発揮できる距離から外れた上、頑強な大樹を切り裂けば切れ味は激減する。そう、グレンデルの悪魔ならば容易に抵抗できる強さまで。

舌打ちし、サラは自分の愚策を悟る。

何のためにこの戦鎚を握ったのか。この戦鎚の名がなんだったのかを忘れていたのか。

求めなければいけないものは一撃。この『砕くもの』を握ったからには、かの破壊神の力を振るうからには、様子見の攻撃などするべきではなかったのだ。

ギリリ、と握る手に力がこもる。技などない。ただ、上から振り下ろすだけ。それ以外の攻撃など必要ではない。

サラが一撃に賭けることを見て取ったのだろう。グレンデルの悪魔は森林部から出てきてわざわざ真っ向から直線でサラへと迫る。

十ヤードほどあった距離が一瞬で縮まる。目で見える速度ではない。風よりも速く地を掛けたグレンデルの悪魔は、一撃のもとにサ

ラを斬ろうとし――。

「……ヒヤハッ」

それよりも更に速く振り下ろされた戦鎚の一撃により、剣や盾ごと肉体を完膚なきまでに破壊されていた。

戦鎚の一撃を放ったサラは、自分の足で立てないほどに疲弊し尽くしていた。

極度の集中と、一瞬に凝縮して放出した魔力の多さ。そして、知らないうちに引き出していた戦鎚の巨大な力の負担が大きすぎたのだ。

「あ、く、うう……」

唸り、なんとか倒れないよう戦鎚を杖にして立つ。

そんなサラの背に、からかうような声が掛けられた。

「ヒヤハッ、小鹿みてえだな。だが、よくやった。我の、俺の、私のような存在、すなわち魔人を、よくぞ無傷で倒した。褒美だ。この千変の樹海の最奥に封じられし者について、少しでも教えてやるう」

それは、頭部以外の全てが粉碎された、死者からの最後の言葉だ。

遮る術をサラは持たず、遮る理由もまたサラは持っていなかった。

「我は、俺は、私は中級魔族だった。だが、この千変の迷宮に封じられているのは上級魔族、つまり我より、俺より、私よりも一階級上の存在だ。ああ、ちなみに最上級魔族とかいうやつらもいるぜえ、この迷宮の奥にはなあ。ヒヤハ、ヒヤハハ。」

死ぬなよ、死なずに地獄を見るがいい。我を、俺を、私を殺した者よ、壊したものよ。この迷宮、その最奥にある地獄を、天国を、果てを知るがいい。ギヒヤ、ヒヤハハハハハハハハッ――！」

哄笑と共に灰と化し、消え去っていくグレンデルの悪魔。それを見ながら、サラはぼつりと漏らす。

「……ええ、死にませんとも。わたくしは、わたくしの使命を果たすまでは、絶対に死にませんわ」

言って、サラは花びらの吹き飛んだ石畳へと腰を下ろす。

グレンデルの悪魔の灰がちよつと残っているため不愉快だが、しかし反動が大きくてしばらくは立てそうにない。

引き出した力を使ったのが、瞬間的なものでよかった、とサラは吐息する。今のサラを蝕むのは肉体的苦痛だけで、魔力を使うには特に問題はない。だから広域の索敵もできるし、近づいてくる魔物に対処もできる。

だから、と言うわけでもないが。

サラは一戦終えた清々しい気分で舞い散る花びらを見る。いつもは休むことなく動いているし、色々気にしすぎてこの美しい景色をゆっくりと眺めたことなどなかったことを思い出す。

「いつか、イーリスちゃんがちゃんと戦えるようになったら、お花見でもしましょうか。わたくしも、ちゃんと神器を扱えるように鍛

え直さなきゃいけませんし」

苦笑し、動けるようになった体に鞭打って立ち上がる。

折角第二階層に来たのだ。この第二階層でしか採れないものをたくさん持って帰るべきだろう。協会へ提出する試料のほかに、イーリスやオリオールのために何か持って帰るのも悪くはない。

悩むべきことはいくつも出てきたが、それはまたあとで悩めばいいのだから。

ゆっくりと、しかし確実に迷宮攻略は進んでいく。

迷宮の奥底で、何かが僅かにうごめいていた。

第一章 了

第十二話

がやがやと酒場が賑わっている。

ほんの一月ほど前までは閑古鳥が鳴いていたとは考えられない盛況ぶりだ。

酒場はその町々の顔役であり、色々な人が愚痴を言いに来るものだ。そこに目を付けた冒険者協会が酒場に様々な依頼を委託したため、その依頼をこなして報酬を得ようとする者達が集まってきているのである。

「ツカー、迷宮帰りに飲む一杯はたまんねえな、オイ」

「鎧猪の焙りもヤバイぞ。でも、どっかのツエー冒険者が持つてこないと食えないんだよなあ、コレ」

酒場の片隅で安いエールを飲みながら、二人の男がそんな話をしている。立派なあごヒゲを蓄えた方は水でも飲むようにガバガバとエールを飲みまくっていて、もう片方のちよつと太り気味な方は物凄い勢いで骨付きの肉にかぶりついている。

二人とも革製の鎧を着ていて、ところどころに傷や汚れが見える。話からもうかがえるように、迷宮から戻ってきたところの冒険者のだろう。

「肉系を持つてくるのはほとんど金髪のお嬢ちゃん一人らしいぜ。

十五、六ぐらいの。ベッピンさんらしくて、騎士様たちが騒いでた」

「あーあー、知ってる知ってる。最近、武器屋にだけえ甲羅持ち込んだたよ、その子。なんか、結構有名らしいな。第三、第四階層辺りの素材を中心に持つてくるから、近所の錬金術師が泣いて探してた。俺にも卸してくれーって」

「第三、第四つてスゲーな。魔術師連中も頑張つて第二階層を踏破

寸前って段階らしいのに」

「第二階層に進める連中も、まだ騎士様でさえ数組なんだろ？ 景気の良い奴もいるもんだなあ」

ガツハツハ、と笑いあい、二人は各々の好物の攻略を進める。ヒゲの男は調子が出てきたのか蒸留酒を瓶で頼み、太っちょは他の肉を食べ始める。今回の探索ではそこその成果を持ち帰ったのだから、懐の具合を確かめる様子もない。

迷宮は五人から六人以上で挑むことを推奨されてはいるものの、第一階層の入り口付近で小型の魔物を倒したり、木の実や薬草を採取する分にはあまり危険ではないので、少人数の部隊を組む者はそう珍しくはない。ただ、たまーに入り口付近にも危険な魔物がやってくるため、それを承知で探索を行う必要があるが。

なににせよ、現状ではどんな零細の冒険者も需要がある。冒険者にとつて迷宮内で採れる薬草で作られた魔術薬は生死を分ける重大な存在だし、迷宮内に生息する魔物の幾らかは食用としても衣服としても武器防具としても需要は大きい。今、この冒険者二人が食べている鎧猪などは食べてよし、毛皮にしてよし、甲殻を防具にしてよしの三拍子揃った素晴らしい存在の一つだ。鎧猪を一頭丸ごと腐らせずに持ち帰れば、しばらく遊んで暮らせる程度の儲けが出るだろう。

一獲千金を狙える上に、数多くの魔物を撃破すればどこかの貴族辺りに目を掛けてもらえるかもしれないという希望があれば、冒険者を志す者も多くなるというものだった。

また、別に大物を狙わなくても、ちよつと珍しい薬草や果実の在り処さえ知っていれば危険を冒さずに生活できるのも迷宮の特徴だ。

「そつえば、前に騎士様が騒いでたな」

肉をモリモリ食べていた太っちょが思い出したように、手のフオ

ークとスプーンを止めた。

それにヒゲの男はすかさず食いついた。こういう話題は下世話好きな冒険者の大好物だ。酒を飲む手を止め、面白がるようにずいっと前に出る。

「お、どこの騎士様よ」

「ありや、ここの騎士じゃねーな。ラウドラント辺りじゃないか、真っ白い鎧に綺麗な紋章付けてたし。でな、なんか迷宮内で変なのにあつたって冒険者協会でおっさんに詰め寄ってた」

「いいねえ、酒の肴にやびつたりだ。おら、先を話せよ」

口寂しくなったのか、ヒゲの男は木製ジョッキを引っ付かんで一気に干す。わくわくとした目は子供のようでもあり、笑いを誘う。

太っちょは待て待て、と制しつつ、皿の上の肉を一かけ口に放り込んであまり噛まずに飲み込む。噛まずに食べるから太るのだろう。

「いや、それが傑作でな。スゲーでかいトカゲに仲間がやられまくったってよ。第一階層だから、あれだろ、近付いちゃいけないところに行っただろうなあ」

「あーあーあー。協会に行くとか絶対に行くなよって念を押される場所がいくつもあるよなあ。素直に言うこと聞けばいいものを」

パンパンと手を叩いて笑うヒゲの男。酔い始めているようだが、呂律はしっかりしている。相当酒に強いようだ。

太っちょもその騎士達の様子を思い出しているようで、笑いを止める気配はない。

「ひゃひゃひゃ、馬鹿だよなあ。あそこには魔術師でさえ絶対に近付かないってのによ」

「違えねえ。しかし、ラウドラントの騎士かあ。お隣さんだあな。」

何人ぐらい死んだのやら」

ヒゲの男は自慢のあごヒゲを撫でつけながら片眉を上げる。人の不幸は蜜の味。彼らにとって、お偉方の不幸はよほど甘い物なのだろう。

太っちょは太っちょでもリモリと肉を食い、まだ食い足りないのか肉を追加注文しつつ宙を睨んで思い出す仕草を取る。

「さあなあ。すげえ剣幕だったし……十人くらい死んだんじゃないか？ この辺りの騎士様もちよいと油断すると隊を組んでも一人二人は死んじまうらしいし」

「神様の御威光伺いがこんな田舎で戦死かあ。うちの王様に言いがかりでも付けてたりしてな」

はあ、と二人して嘆息する。ラウドラント、つまり聖ラウドラントは自らを神に愛されし国と自称し、国土は狭いものの外敵を寄せ付けぬ屈強の騎士団を擁している。建国以来、一度として自国の地を戦火に晒したことがなく、侵略も行っていないため、強い権威を持つ国でもある。

しかも、内に籠っていてくれればいいものの、友好関係にある国が攻撃されたときは自国の戦力を派遣したり、色々と各国に言っただけで鬱陶しい面も持つ。叩き潰すには面倒で、しかも国土が狭くて手にした旨みも少ないために攻められないという嫌な国だ。

ただし、嫌な国だが、実際に強力な治癒魔術——ラウドラントでは神聖魔術と呼ぶ——の使い手を多く輩出しているため、あながち神の加護があるというのも間違いではなさそうである。それはそれで鬱陶しいが。

「あるかもよ？ 商人が言ってたが、なんか喧伝してたそうだ。えーっとなんだっけ、そうそう、えー」
「我らが神の騎士団に平らげら

れぬものはなし。かのガイラルの迷宮も我らが一番に踏破するであ
ろう』とか言いふらしてたつてよ」

「オメーどっからそういうの聞いてくんだよ。最高だぜ、相棒。し
かし、その神の騎士団とやらの大きな傷が出来たわけだ。何人ぐら
い来てんのかね？ あんまり真っ白けな奴らなんて見ないし、あん
まり多くなさそうだが」

「グフツ、流石に普段は普通の服じゃね？ 普段から白い服とか窮
屈でしょうがないだろ。自分から騎士とか神官だつて言ってるよう
なもんだ。こうやって食いまくることもできないんじゃ、生きてる
意味ねー」

運ばれてきた肉料理をほおぼりつつ、太っちょは苦笑する。ラウ
ドラントの奉ずる神は清廉かつ節制を好むと言われていて、贅沢を
忌むという。その割には白一色の鎧を使うなど、色々金を使ってい
るのだが。

とはいえ、彼らにとって、そういう節制こそが悪だ。明日をも知
れぬ冒険者。常に最後の晩餐のつもりで生きるのがこの二人である。

「お前は食い過ぎだ。んで、俺は飲み過ぎ。過ぎたるは素晴らしい
つてなあ！ 飲み食いぐらい、好きにやるのが人生だぜ」

「おお、そうよ、兄弟。俺ら地に這う連中は飲んで食って騒がにや
損だ！」

二人で笑いあい、テーブルの上でがっしりと手を握って組む。ヒ
ゲと太っちょの二人がやると非常に暑苦しいが、この酒場の人々に
とっては見慣れた光景だ。誰も気にしない。

しばらくそうしていたが、すぐに二人とも自分の好物のことを思
い出したのか、いそいそと座り直す。

そして、そのまま黙って飲み食いしていたが、太っちょが何かを
思い出したように口を開いた。

「あ、そういや、こんなうわさ知ってるかよ?」

肉の最後の一かけらを口に放り込み、太っちょは笑う。

「迷宮にや、悪魔が住んでるってうわさだ」

活気のある街並みを、サラは眩しそうに見ながら歩いていく。
イーリスの手を引き、ところどころにある屋台や露天を冷やかしながら歩くのだ。

一応、イーリスには帽子を被せている。頭の上にある蕾がつぶれないか心配だったが、どうも物理的なものではないらしく麦わら帽子の下に簡単に隠れてしまった。苦戦することを予想していたため、サラとしては少々肩透かしを食った気分させられてしまった。

まあ、簡単に隠れるのはいいことだ。服も別にイーリスの一部とすることはなく、普通に着せ替えられるし。

ちなみに今日のサラは私服だ。ここ最近は一ツツとした実用一辺倒の戦闘服を着込んでいることが多かったが、今日は久々に与えられた完全休養の日なので年頃の少女らしく清楚にまとめている。白のワンピースに、肘まである絹の手袋。避暑地のお嬢様、といった格好だ。

イーリスも同じような格好だが、こちらは清涼感溢れる水色のワンピースで、手袋などはしていない。ちよつと背伸びしているかな、という感じが。

はたから見れば、お姉さんと妹という感じに見えるだろうか。髪の色が違うが、異種族の血が混じっていれば髪の色くらい家族でバ

ラバラという光景も珍しくはないのだから。

ちなみにオリオールはお留守番だ。意地悪とかそういうのではなく、オリオール自身が人ごみを嫌ったのである。蝶の体のため、人が多いと潰されそうで嫌なのかもしれない。

そのことを思い出し、サラは僅かに笑みを深める。オリオールにも、何かおみやげを買って帰ったほうがいいだろうか。

蝶へのおみやげという何だろうか、などと考えて周囲を見渡すと、何かを食べている人が多く見られた。空を見上げれば太陽が中天にある。

もう昼のようだ。迷宮内では食べられるときに食べるという不規則な食生活なので、人間らしい営みを忘れていた。

「イーリスちゃん、何が食べたいですか？」

なので、とりあえずサラはイーリスに希望を聞くことにする。

サラ自身は特に好き嫌いなくなんでも食べられるので、イーリスに合わせるつもりだ。

と、イーリスは悩む様子さえなく、笑顔で即答した。

「お姉ちゃんの料理が良いなっ」

ちょっと驚くサラ。予想していなかったわけではないが、まさか本当にその答えが返ってくるとは思ってもしなかったのだ。

しかし、聞いておいて応えないわけにはいかない。

サラは家にある食材その他を思い出しながら苦笑した。サラが家に数日単位で帰ってこないことが多いので、大した物は残っていない。昨日持ち帰った折に少し分けてもらった鎧猪の肉が多少残っているぐらいで、それ以外は乾物などの保存食ばかりだ。サラが迷宮に潜っている間、イーリスの面倒を見てくれている職員には頭が下がる。

「では、材料を買って帰りましょうか。今日は好きなものを作って差し上げます」

「ホント？　じゃあね、えっとね！」

はしゃぐイーリスを見て、サラは笑みを深め——遠くから自分達を盗み見ている何者かに挨拶をしておく。

ごく弱い威力の電撃魔術。静電気でビリツと来るのを十倍ぐらいに強めたものだ。それを放ってから、見られている方を睨む。分かっているぞ、と。次はない、と。

街中でさえ索敵魔術を常時展開するサラに死角などない。数百ヤード離れたところから見られていても捕捉できるし、魔術を使用して見ている相手ならどれだけ離れていようと感知できる。一度ならば警告で済ませるが、次に同じことをしたならばその時点で人生を終わらせる。魔術師協会の暗部として汚れ仕事も行っていたサラを狙うということ、それがどういうことか身を持って知ることとなるだろう。

そんな血生臭いやり取りを一切表に出さず、サラはイーリスと歩いていく。

いつもと、全く変わらずに。

第十三話

大上段から振り下ろし、そのまま一步踏み込みながら右斜め上へと振り上げる。一步下がりがながら薙ぎ払い、石突で突く。

柄を短く持ち、巨大な戦鎚を自分の体に這わせるような軌道で振り回す。長い柄が邪魔になり、普通なら大したこともできないだろうに、サラは逆にその柄の長さを利用して攻撃を行う。

この戦鎚のような長柄武器は懐が弱点だと相場が決まっているが、弱点を克服してこそ使い手だと言えるのだ。サラもそんな使い手の一人である。

柄を上にして戦鎚を地に着け、サラはそのまま戦鎚の重量を利用して強力な蹴りを放つ。柄に重心を置き、戦鎚の重量さえ上乗せする強力な前蹴りだ。まともに当たれば分厚い鋼板にさえくつきりとした足形を残すだろう。

更に蹴った足を引く動きを利用して前に出、肩口を相手に付けて強力な踏み込みの力を戦鎚の重量を上乗せして流し込む。

そして――

「あのー、キリがないのでそろそろ訓練をやめて、こちらを向いてくださいな」

サラは訓練の動きを止め、声の方を向いた。

柵もない庭で訓練しているので、訓練を止められるのは仕方がない。しかし最近の来客は何故狙い澄ましたように訓練中にやってくるのだろうか。

いささか不機嫌にはさせられたが、結構離れているこの家まで冒険者協会から来た使いだ。邪険にする必要もないだろう。

とりあえず、サラは戦鎚を地に着けながら口を開いた。

「それで、どのようなご用件でしょう。明日の朝には冒険者協会に顔を出させていただくのに、わざわざ今いらっしゃるなんて」

出来る限り刺々しくないよう、不機嫌を隠しつつサラは言う。隠し切れていないが。

使いで来た女性は声音の険を感じ取ったのか、体を縮ませてうつむきながら話し始める。

「非常にまずい事態で、かつ微妙な用件なんです。我々が公に動いていると知られると危険なぐらいに」

「……厄介な用事が多いですね。でも、わたくしが動くほどのことですか？ 今はわたくし以外にも主力級戦力は来ているはずが」

「私が一存で話せることではないので、すみません。ただ、言えるのは生半可な戦力では話にもならない、ということです」

スツとサラの目が細められた。

迷宮内で生半可な戦力で話にならない、と言われて考えられるのは現時点では二つ。

守護者と、眠りから覚めた古の魔族神族だ。

前者は他でもなんとかなるようになってきたが、後者はこの街にいる戦力での対処は難しい。万全を期し、その上出来る限り早くの対処を望むならサラを使うしかないのだ。一応、魔術師協会を見渡せば後者を対処できそうな人物はサラを含めて十人強いが、誰も彼もそう簡単に動けない状況にある。つまり、早期の解決を望むならサラを用いるしかない。

嘆息し、サラは仕方ないと諦める。こうした既成事実を積み重ねていくことで、迷宮内で起きた面倒事に対する便利屋に仕立て上げられているのを自覚しながら。

「分かりました。イーリスちゃん達も連れて行ってよろしいですか

？」

「構いません。どうも危険はないようですので」

「はあ、では、家の中でお待ちください。着替えてきますので」

言つて、サラはイーリスに使いの女性の相手を頼んで、着替えるために自室へ戻る。

着替えている最中に聞こえてきた、陶器の割れる音はあまり気にしない方がいいのだろう。

冒険者協会本部の一室、広い会議室に通されたサラは部屋の雰囲気
に眉をひそめた。

想像していたような緊迫した空気ではない。どうも困惑している
ようで、頭を抱えている者が多い。

とりあえず、サラは張りのある声を出す。

「すみません。サラ・セイファート、参上いたしました」

その声を聞き、頭を抱えていた者達がばつと頭を上げた。

「よく来てくれた！」

「いや、ああ、助かった。今、君に相談する前に出した部隊が帰っ
てきたんだが、どうにもこうにも」

「事情は口では説明しにくいんだ。おい、報告書をあの子に渡せ。
とりあえず接触の結果を伝えないと」

色濃い疲労を隠せない顔色をした男女が口々にそんなことを言う。何ごとか、とサラが不審に思いながら下座に着くと、報告書が回されてきた。

「読んでくれ。とりあえず、話はそれからしよう」

現冒険者協会長の疲れ切った言葉に押され、サラは報告書を読み始める。

簡潔にまとめられた報告書を読み終え、サラはその情報を整理してから大きく息を吐いた。

なるほど、これは混乱する、と。

報告書の内容を要約すると、こうだ。

- ・ 迷宮の第一階層の奥に、最近妙な家が建った。
- ・ そこには整った顔立ちをした魔族の老紳士が住んでいる。
- ・ 老紳士は自らを悪魔だと名乗った。
- ・ 老紳士は悪魔なので代償と引き換えに願いを叶えてくれるらしい。
- ・ が、部隊員が試しに願いを告げたが、願いは叶えてくれなかった。

その接触の時に、ちよつとしつこくし過ぎて追い返されたと結ばれている。ちなみに老紳士とは普通に会話可能で、なんと自宅にあげてもらい、お茶と茶菓子まで出してくれたという。ついでにそのお茶の材料と作り方まで教えてくれたという。茶葉は迷宮内のものらしく、生えている場所や木の特徴まで事細かに記されていた。

「どうかね？ この紳士、魔族であることは間違いないようなのだが……」

「敵対する意思はないようですね。下手に攻撃しなければ、別に大

丈夫なのではないでしょうか？」

「それがそうもいかなのだ。この部隊に願いを叶えてもらったものはないが、どうも第二階層に到達できる騎士団の数人が願いを叶えてもらって、死んでいるようなのだよ。」

どうも適当に思いついた願いだと駄目だが、最初から強く願っていることなら叶えてくれるようなのだ。そのうわさが広がって、ちょっと無茶な数の人々が迷宮へ入ろうと押しかけてきてな。とりあえず事実は確認されていない、と返答して帰したが、納得はしていないだろうなあ。

そこで君に頼みたいのだが、この老紳士に接触し、可能ならばここへ連れてきてほしい。出来なければ、質問状を作ったのでそれに回答をもらってきてくれ」

冒険者協会長はそう言いつつ、頭痛でもするのか頭に手を当てる。どうも悩みの種は尽きないらしい。

しかし、疑問がある。聞いた用件だと、サラが動く必要はない。

というか、出向いて帰ってこれる部隊があるのだから、質問状への回答ぐらい簡単にもらえるはずなのだ。

「あの、敵対関係にないのでしたら、わたくしが行くことはないのでは？ 怒らせて追い返されたようですが、危害を加えられてはいないようですし」

「……それはだね、主力級の戦力は基本的に脳ミソまで筋肉で出来ているからだよ。あのバカども、人が穏便に、友好的にとさんつざん言い含めておいたのにわざわざ喧嘩腰で行って、怒らせて帰ってきやがって……！」

他の部隊もそれを賞賛してたりしてなあ。ふ、ふふ、人を殺意で殺せたら、どれだけ素晴らしいかね？」

暗い目をして、虚ろに笑い始める冒険者協会長。表に出せないイ

ライラを相当溜めこんでいるのだろうか、見るからにヤバイ目をしている。

が、サラにはあまり関係ない。気にすることなく、話を続ける。

「ご愁傷様です。それで、質問状はもう出来ているのですか？ それなら、早々に行って終わらせたいのですが」

「当然、出来ている。すまない、もう少し他の冒険者が育つまではこういう雑事も頼むことになってしまっただろうが……」

「いえ、お気になさらずに。では、行ってきます」

「頼んだ」

封書を受け取り、サラは軽くそれを見る。蜜蝋で封がされ、透視などが出来ないよう魔術による封印までなされているようだ。随分な念の入れよう。恐らくは冒険者協会だけでなく、魔術師協会も件の魔族に注意を払っているのだろう。

一礼し、サラはイーリスとオリオールを連れて出ていく。

また、厄介ごとが増えそうな予感を感じながら。

第一階層はサラにとっては行動が容易い場所だが、他の者にとっては死地である。

最近では使い捨ての魔道具などの擬似的に魔術を使える品が流通し始めたので、魔術師や騎士以外の者でも死者は減ってきている。ガイルウルフなどの常に群れを作る魔物以外なら魔道具を用いれば倒すことは難しくないため、徐々に進出範囲は広がってきているらしい。

だが、やはり奥に行けば行くほど危険度が上がるのは変わらないため、まだ第一階層全土を安定して探索できるのは一握りに限られ

る。

また階層自体が広いため、体力で劣る女子供には厳しい場所だ。たとえばイーリスなどにとっては戦闘と死は等号で結びつけられるだろう。

目的地までの道のりのまだ半分にも到達していないのに疲れ切っているイーリスを横目で見ながら、しかしサラは足を止めない。

厳しいようだが、これはイーリスが望んだことだ。いつまでもサラに運ばれていては駄目だからと、自分の足で歩きたがったのである。ただもう夜が近く、魔物が活発になる時間が近いのため、歩くのではなく走り続けてきたのだが。

心配そうにイーリスの周りをオリオールが飛ぶ。が、オリオールも手を貸す真似はしない。イーリスにとって超えるべき試練の一つなのだから、ここで手を貸したら何にもならない。助けてもらえる、と最初に認識すると、後になっても必ずそのことが頭の中になり続けることになる。本格的な訓練を開始すれば頼りになるのは自分だけなのだから、そういう認識を持たせることは害にしかない。サラやオリオールにとっても、今は我慢の時だった。

第一階層の地図を完全に頭に叩き込んでいるサラは一切迷うことなく進んでいく。それは一度も立ち止まらないということだ。イーリスがいるため、木々や灌木を無視してまっすぐ進むという暴挙に出ることは出来ない。石畳の上をひたすらに走り続ける。速度はイーリスの出せる八割ほどの速度だ。およそ時速で三十マイル。サラにとっては魔力を使わずとも、平然と走り続けられる程度か。だが、体の小さなイーリスにとっては魔力を用いても、長時間は厳しい速さと言える。

しかも、サラは最短距離をひたすらに突き進むのだ。直角に曲がるような場所でさえ体重移動と足さばきだけで速度を落とすことなく進むため、そういう技術をまだ習得できていないイーリスにとってはキツイ。また、森林に作られている道だからか、それとも誰かを迷わせるためなのか緩やかに曲がっていたり、妙な角度でジグザ

グしていたりと走るには不向きな場所である。

初めて挑む休憩なしの長距離走。いつ魔物と遭遇するか分からない緊張感。不慣れな曲がりくねった道。その全てが、イーリスから体力を奪い去っていく。

そして、そのことをサラは承知で、一定の速さを保ち続けていた。正直なところイーリスが休憩したいと言い出せば、サラは即断で承諾する。別にそのことでイーリスの評価を落したりもしない。数マイルもの距離を十歳ぐらいの子供が全力に近い速度で走り続けることなど無謀なのだから当然のことだ。

ただし、イーリスからの提案でなければ受け入れない。オリオールが言いだしても、またサラ自身が休ませようと思ってもそれを実行することは出来ない。自分の限界を自分で知らなければ、過酷な環境で生き残ることは出来ない。なので、イーリスが座り込んだり、休憩を申し出なければ、イーリスがぶっ倒れるまで走り続けるつもりだ。

既に限界を迎え、根性だけで走っているイーリスを見ると一も二もなく抱きしめなくなるが、サラはその衝動を抑えてひたすらに走る。

今走っている緩やかな湾曲部を越えると、また鬱陶しいジグザグの道が来る。ほとんどの場所の道幅は広くせに、こういうところは狭いのが非常に嫌らしい造りと言えるだろう。

さて、とサラが十連続するジグザグに備えて気合を入れた時だった。

どさつと音がして、後ろからの足音が途絶える。見るまでもなく分かる。イーリスが倒れた音だ。

振り向けば、イーリスがうつ伏せに倒れていた。抱き起こすと、真っ青な顔で虚ろな目をしている。完全に限界を超えてしまったようだ。

サラはリバース・スペースから用意しておいた飲み物を取り出す。果物から精製した糖を溶かし、塩分などを僅かに加えた水だ。それ

を口に含ませつつ、サラは水を魔力で作りだし、イーリスの首筋や腋の下、内腿などの太い血管の走る場所を覆う。

体を冷やし、水分を補給させることが大事なのだ。ただし、一度に多くの水を飲ませることはしない。何回かに分け、ゆっくりと吸収させる。また、深く呼吸させることも忘れない。

「頑張りましたね。でも、頑張りが過ぎです。次からは倒れる前に言ってくださいね」

イーリスを軽く抱き起した状態で、サラは優しく言う。

ここで休ませておきたいが、残念ながらそんな余裕はない。今は一刻も早く第一階層を突破し、迷宮を出たいところだ。

なので、サラはイーリスを魔術で浮かせ、空気の抵抗を受けないよう周囲を障壁で囲い、それを魔術で引っ張って進むことにした。高さを一定にし、水平移動させることで振動などを与えず、疲弊しているイーリスに更なる負担を掛けないようにする処置だ。

詳細は違うが、オリオールが高速移動するのと似た術式だ。やや消費の大きい魔術だが、サラにとっては問題ない。

オリオールがイーリスに掴まるのを確認し、サラはそれまでに倍する速度で走り始めた。魔力で全身を強化したその速さは人語を絶し、風より早く迷宮を踏破する。

半分まで到達するのに二時間以上を掛けていたのに、僅か数分で残りを走りきる様は怪物としか言いようがない。

目的地に着いたサラは、報告にもあつたそれを見て、ただただ絶句する。

この千人以上の命を飲み込んだ迷宮に、家が建っているのだ。そう大きな家ではない。レンガ造りの、恐らくは一人暮らし用の家。白い漆喰の壁に、赤い屋根。屋根から伸びる煙突からはもくもくと煙が上がっている。

外なら普通の光景だが、しかしこの迷宮の中では一際異質なものの

だ。

木々や背の高い草の中で目立つ家。最初に見つけた者はどれほど驚いたろうか。夢か幻でも見ていると思ったに違いない。

実際、サラも幻ではないかと思いたくなる。

だが、残念なことに現実だ。そして、この家に用があることも現実である。

二度三度と深呼吸し、意識を落ち着けたサラは、意を決して木製の扉をノックした。

「すみません、どなたかいらっしゃいますか？」

失礼にならないよう、大きくはつきりと声を掛ける。

と、存外あっさりと扉が開かれ、中からぬつと老紳士が顔を出す。

「何か用かね？ いやはや、客の多い日だ」

しわがれた声で言いながら、老紳士はゆっくりと家から出てきた。背筋がぴんと伸びた、老いを感じさせない動き。灰色を帯びた肌には年輪の如くしわが刻まれ、その生きてきた年月を感じさせる。頭に生える立派は二本の角は羊のように軽く曲がっていた。

見ただけで分かるほどに強大な魔力を有し、そこに立っているだけで他を圧倒する威圧感を放つ。

サラが見た唯一の古い魔族であるグレンデルの悪魔はこれほどではなかった。恐らく、この人物は……。

「お初にお目にかかります。わたくし、サラ・セイファートと申します。本日は幾つか伺いたいことがあつて参りました」

サラは優雅に一礼し、老紳士を真っ直ぐに見る。

と、老紳士も右手を胸の前に持ってきて、ゆっくりと一礼する。

「こちらはイヤル・ゼグル・ガイグリードと言う。恐らく分かっているのだろうが、上級魔族に位置するものだ。
我が家にようこそ、グ・ランデル・オルゴーンを打倒したものよ。礼儀を知る者ならば、こちらも返答の用意がある。立ち話には長くなるだろう。入りたまえ。大したもてなしもできないが、歓迎しよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8068x/>

ガイラルの迷宮

2011年11月12日23時38分発行